

「違うんです！俺は、か
なでちゃんと音無君の
イチャイチャが見たい
だけなんです！ SSS団
には入りませんか
らあ！」
二修羅和尚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は音無君とかなでちやんのカツプルが好きなんです。

1発ネタ

目次

「違うんです！俺は、奏ちゃんと音無君の
イチャイチャが見たいだけなんです！S
S 団には入りませんからあ！」

1

ギルド降下作戦

29 14

DAY GAME

53 39

D
A
Y

C
A
M
E

5

66

Family

上

82

G o o d b y e	2	D a n c e r	D a n c e r	D a n c e r	A l i v e	A l i v e	F a m i l y	F a m i l y
Days		i n t h e	i n t h e	i n t h e	D a n c e r	D a n c e r	A f f a i r	A f f a i r
の そ の 前 に		D a r k	D a r k	D a r k	i n	i n	i n	i n
71	155		142		130		121	下 中

「違うんです！俺は、奏ちゃんと音無君のイチャイチャが見たいだけなんです！ＳＳＳ団には入りませんからあ！」

「…あの、苦無向けるの、やめてくれません？」

「ならばその仮面を外して答えよ。貴様の目的はなんだ」

俺と対峙する長い襟巻きを身につけ、改造制服を着た忍者風の少女。

もしこれが告白現場とかならまだドキドキしたのだが、それとはまた違う意味で俺の心臓はドキドキしつばなしだ。

「いやあ…それはちょっと」

言えないのですが、と言葉を続けようと目の前には迫り来る苦無。しかし、それをこの体は危なげなく避けて背中に背負った身長ほどもある太刀、『物干し竿』の柄に手をかけた。

今の避けてなかつたら絶対刺さつてたよね!?死なないけど死ぬほど痛いのかマジ

2 「違うんです!俺は、奏ちゃんと音無君のイチャイチャが見たいだけなんです! SSSS入りませんからあ!」

で勘弁なんだけど!?と内心で叫びたいが、そうしてしまふと俺の眼下の者達に気づかれて、せつかく待つた原作の流れが崩壊する危険もある。

グッと堪えて相手を見てみれば、今度は両手に二刀の小刀を構えていた。

何それ物騒。

「答えないならば、殺した上で連れて行く。覚悟してもらおう」

彼女の名は椎名。正式には、『C7』

この物語において中心となるSSSS団のメンバーであり、作中屈指の実力者。本当に、原作初日からこんなことにして、俺は骸骨の仮面の下で小さく文句を零すのだった。



目が覚める。

辺りを見渡してみれば暗いため、今は夜なのだろう。教室らしきその場所に設置された時計を見れば時刻はすでに丑三つ時。まあ、誰にもみられないことを考えればちょうどいい時間だろう。

自分の体がちゃんと存在していることを何度も確認した俺は、とりあえずあの夢のような体験は現実だつたのだと改めて確認したのだった。

意識はあるのに体がないという、多分なかなか体験できない貴重な時間だつたのかも
しないが、あのむず痒い何とも言えない感覚はもう一度体験したいとは思わない。

とはいえ、俺の体はあつても原作の主人公のように記憶喪失という可能性も僻めない。ここはひとつ、声に出して確認していくことにしよう。

「名前は山野やまの直樹なおき。元高校生で、車との衝突による事故死。神と邂逅の後、
この世界へ来た、と…」

すらすらと自身の身に起きたことを言えるあたり、記憶は失つてはいないようだつた。

よかつたよかつたと安心する反面、よく考えてみればこの世界の主要キャラ的に神と
会つたことがあるというのは非常にまずいのではないだろうかと思わなくもない。大
丈夫？俺、神の遣いだー、なんて言われて撃たれたりしない？

「…出来るだけ関わらないようにしよう」と

うんそうだそうしよう、と自分に言い聞かせるように何度も頷く。そもそもの話、原
作には登場しない俺というキャラが入り込めば、最悪の場合原作とは程遠い結末を迎
ることになるかもしれない。

それは、この世界へ転生・転移？させてもらった俺の望むところではない。あくま
で、俺は傍観するためだけにここに来たのだから。

4 「違うんです!俺は、奏ちゃんと音無君のイチャイチャが見たいだけなんです! SSS入りませんからあ!」

『Angel Beats!』:死んだとはいっても、まさか画面の向こうからではなく、この目で物語を見る事ができるとは。人生、何が起こるか本当にわからないな。もう死んでるけど』

設定的にいえば、この世界に存在するのは青春を謳歌できずに死んでここに来た少女と、彼らがN P Cノンプレイヤーキャラクターと呼ぶ、元々ここにいる一般生徒と教師のみ。

そしてこの世界はこの死後の世界の学園を舞台にした物語である。当然、主要なキャラは前者のこの世界にやつてきた少年少女達だ。

彼ら彼女らは理不尽な死をもたらした神に復讐するために、リーダーである仲村ゆりを中心にチームを結成。以後、この学園の生徒会長である立花奏を天使と呼称し、日夜戦っているのだ。

どうやって戦う?銃火器とかハルバートとかに決まつてんだろうそんなもん。天使はつて?プログラミングで作った武装とか羽とかだよ。

まあ、そんな感じで争つてる両者なんだが、ある日、この世界に主人公である音無おとなし結弦ゆづるがやつてくる。

彼は記憶喪失で、最初は仲村ゆり率いるSSS団死んだ世界戦線へ加入し、立花奏と争うんだが、その途中で立花がそんな悪いやつではないと気づき、仲間達を説得。そし

て糺余曲折あつて仲間になるのだが、今度はこの世界が一、的な話だ。
知りたかつたら見る。そして好きになれ。鍵つ子になるのだ。

話が逸れた。

そして俺の目的は、この音無君と奏ちゃんの二人のイチャイチャを近くで眺めることである。

イチャイチャ、といつてもそんな露骨なものではないのだが、その二人のやりとりは何度見ても尊いの言葉しか出てこない。

確かに、日向とゆいの二人もいい。第10話のやんよのくだりは最高だと誰もが賛成の意を示すだろう。

しかしそれでも、俺はこの二人がみたいのだ。最後のシーンなど涙なしでは語れないといつても過言ではないはずなのだ。

それを!!　　この目で!!　　みたい!!（追真）

だからこそその転生なのだ。死んでるから『生』などと言えないが、転生なのだ。多分、転移でもええんやで？

6 「違うんです!俺は、奏ちゃんと音無君のイチャイチャが見たいだけなんです! SSS
入りませんからあ!」

「とにかく、だ。俺の目的はあくまで傍観。下手に関わって音無君と奏ちゃんがくつつかなかつたら、全て水の泡と化す」

仮に入団することになったとしても、それは奏ちゃんが音無君に連れられて入団した後で、だ。時期で言えば副会長と同じくらいか?

物語の終盤ではあるが、俺としては最後まで見守ることができればそれでいい。

となれば、俺は物語の序盤から終盤にかけては一般生徒を演じなければならぬわけだ。でないと、神への復讐のために仲間を募っている彼らに入団を強要されかねない。

だが、下手に傍観しようとするれば彼らにバレる可能性が高くなる。だからこそ、俺はあの神に頼んだのだ。

『暗殺者ジ・アサシン』

顔の前に手をかざす。

すると、淡い白の光が俺の顔を覆い、白い骸骨を模した仮面を形成した。

「成功。性能はわからんが、多分大丈夫なはず」

こと隠密において、俺が真っ先に思い浮かんだのがこれだつた。

f a t e という作品に登場する暗殺者の英霊、ハサン。

気配遮断のスキルによつて正面戦闘ではなく、直接英霊を使役するマスターを狙うことからマスター殺しと呼ばれるアサシンのクラス。そして、そのアサシンのクラスに選

ばれるのが山の翁と呼ばれる暗殺集団の頭領であるハサン・サツバーハなのだ。何でも、歴代の19名の頭領のうち、誰かがアサシンとして召喚されるのだとか。

俺がもらつたのは、このアサシンの気配遮断スキルだ。

攻撃しようとするとその隠密性は著しく低下するのですが、傍観主体な俺は下がることはない。故にすぐそばにいても気づかれないのでこのスキルはまさにうつてつけといえよう。

俺はこれから、音無君と奏ちゃんのラブコメを誰にも気づかれることなく直ぐそばで見守るのだ!!

「ナーハツハツハツ……ん？」

一人怪しげに高笑いしていると、ふと、他に触れるものがあつた。

さつきまでは何もなかつたはずだとそれをみてみると、そこにあつたのは俺の身長と同じくらい長い刀：いや、太刀。

鍔のないその太刀は、俺が転生したのが夜ということもあって、月明かりの差し込む教室内で怪しげに光を反射していた。



どうやら、気配遮断は問題なく使用できるようだ。

転生から数日。休み時間などにも使用してみたが、直ぐ側をすれ違う生徒、教師ともに気づくことはなかつたため、スキルランクはそれなりには高い…と思う。知らんけど。

太刀は活動の邪魔になるため寮へ置いてきた。

原作通りいつのまにか俺用の寮があつたことと、クラスに俺の席があつたことには少しばかりの違和感はあつたし、知らない奴らが俺のことを見つけてるという事実にも薄ら寒いものを感じた。

しかし、それでも馴染まなければ主要キャラ達に俺の存在を知られる要因になりかねない。なんせ、NPC達はここを死後の世界と理解せず、普通の学生として振舞つているのだ。

だからこそ、俺をNPCと認識してもらうために俺もそう振舞わなければならぬ。真面目に学生としてここで生活すれば、前世の未練をなくして卒業とともにこの世界から消える。そうなれば神への復讐が果たせないと考える主要キャラ達は、授業を受けすることはないと教室にいるだけで彼らに遭遇することもなくなる。

テストぐらいだろう。気をつけるのは。

ただ、原作が始まれば彼らはこちらが授業であつても普通に活動する。

その時は俺も授業を抜け出さなければならぬいため、いつまでもこうするわけにはいかない。

ここ数日の気配遮断をフルに使用した調査で、音無君がまだこちらに来ていないことは確認済み。しかし、校長室は占拠されて入り口天井のトラップの存在も確認したため、SSS団は結成しているはずだ。立花生徒会長の姿も確認している。

あとは、彼が来れば全て始まるのだ。

「…早く来いよ、音無君」

なにせ、聞く気もない授業を聞くのはとてもなく退屈なのだから。



回想終了!!

その日の夜に音無君がやつてきて原作が始まつたんだが！

何でこんなことになつてんの!?

迫る小刀の連撃を避け、時には抜いた物干し竿で往なし、近づけすぎないようにと反

10 「違うんです!俺は、奏ちゃんと音無君のイチャイチャが見たいだけなんです!SS
は入りませんからあ!」

撃を繰り出す。

知ってる?これ、全部俺の意思じゃないんだぜ?

どうやらあの神様、俺に気配遮断だけではなく、fateの佐々木小次郎じみた力も
つけたようだ。それも全自动。

それはいいのだが、俺の体のあちこちが悲鳴を上げているのを考えるに、無理やり
くつつけたみたいな感じらしい。

神様って万能なんじやなかつたの?ここ考慮しないとかポンコツじやねえか!?

とはいえ、そのおかげでこうして死ぬことなく動けているのだから文句ばかりも言つ
てられない。

太刀の一閃で距離を取つた彼女は、静かにこちらを警戒して構えを取る。

「…氣配は絶つていたはずだ。何故わかつた」

「隠していたつもりか?あさはかなり。邪な気が漏れていたぞ?」

「何それ恥ずい」

真面目な顔で答える彼女であるが、反対に俺の顔は見せられないものになつてゐるだ
ろう。仮面があつて助かつた。

しかし、あれか。原作の最初のシーンを見ることができて少しばかり興奮して
いたか。それで気づかれたと。

「え、待つて。そしたら俺今後あの二人のイチャつきを見る時は気を立てちゃダメだと…? 何それ無理じやんバレちゃうじやん」

「何を言つているかは聞こえないが、油断は禁物だぞ」

「つ!?

間一髪、体が反応して太刀で小刀を防ぐ。

狙われたのは心臓。

「それはあっちの音無君でしようがつ…!!」

くそつたれ!と彼女の腹に蹴りを入れるも、軽い身のこなしでかわされる。

埒があかない。

それに、このままここで斬り結んでいればいつか相手の増援が来る。

椎名は小刀とかの忍者風の装備であるが、他の者達は野田という脳筋とドスの藤巻を除けばほとんど銃を所有している。援護射撃をされながら椎名の攻撃に対処することは佐々木小次郎の技量があれば問題ないかもしれないが、俺の体が追いつかない。最悪、初日から捕縛されーので原作に影響が出かねないだろう。

なら、ここを切り抜けるしか方法はない。

限界を迎える体に鞭を打ち、構えを取る。

太刀を水平に構え、相手に背を向けるこの構えは一見隙が大きいように見えるだろ

う。

案の定怪訝な様子を見せた椎名は、しかし、これを機だと考え小刀を振るおうと駆けてくる。

本当に

「死後の世界で、死なないことに感謝しよう」

——秘劍 燕返し

◇

さて、その後の話をしておこう。

本当に申し訳ないが、あの場で椎名を仕方なく斬り殺してしまった俺はそのまま逃走。筋肉痛を我慢しながら寮へと帰還した。同室のNPCが訝しげだったが、別に構わないだろう。俺も、大山くんくらいの特徴のなさを目指さなければ。

しかし、メインである音無君と奏ちゃんの邂逅は目にできたためそれはそれでよかつたのだが、それとは別にものすごいやらかしをやつてしまつた感が僻めない。

というのも、ここ数日、彼ら戦線のメンバーがよく校舎内に出没するのだ。

休み時間なんぞ、教室内で人を探している様子。

おかしい。原作にこんな流れはなかつたはずだ。

教室内をうろつくブレザーとセーラー服を着た戦線メンバーたちを、気配遮断を使用してやり過ごしながら、原作の流れを思い浮かべる。

確かに、オペレーショントルネードはこの間やつていたはず。

今度は気づかれないように距離を離して見ていたが、やはり推しのカッフルが敵対している様は見ていて悲しいものがあつた。

で、今度は武器弾薬が少ないからとギルドへの降下作戦を実行するはずだ。

正直な話、戦線メンバーのギャグのようなやりとりは生でみたい気がするが、そうすると俺という存在に迫られる気がする。

だが、先日の俺のやらかしで原作に変化があつたのか。それを確認するのもアリかもしない。

「……いくか、ギルド」

内心で己の欲望が競り勝つことに目を背けながら、俺は教室の隅で静かにそう呟くのだった。

ギルド降下作戦 上

対天使用作戦本部

「高松君、報告をお願い」

「はい。武器庫からの報告によると、弾薬の備蓄がそろそろ尽きるそうです。次一戦交える前には補充しておく必要があります」

「新入りも入つたことだし、新しい銃もいるんじやないの？」

学校内のとある一室。この学園の顔とも呼べる者がいる校長室であるが、彼ら彼女らがそうである訳ではない。

SSS団発足時に校長そのものを職員室へ移動させた彼らは、以降、この場所を作戦本部として利用しているのだ。

ちなみに、校長本人はそれで満足しているらしい。大丈夫なのかこの学園。

「そうね。わかつたわ。本日のオペレーションはギルド降下作戦といきましよう」

その言葉に空からの降下を想像した音無であつたが、ギルドが地下の奥深くにあるこ

とを伝えられて驚愕を露にする。

ギルドを抑えられれば、銃や弾薬などの物資がなくなり、天使との戦いに勝ち目がなくなる。そのため、今回の作戦は天使にばれないように行わなければならない。

ゆりがギルドへと連絡を入れ、作戦は今いるメンバーで行くことを伝える。

途中、野田がいないことに大山が気づいたが、あのバカはどうせ単独行動しているだろうと、日向が呆れていた。

「それに、今の私たちには天使以外にも注意すべき敵がいるわ」

「椎名さんが殺されたっていう、骸骨の仮面の男、だよね」

ぶるりと身を震わせる大山。そんな彼に続いて、部屋にいたメンバーたちも各自の反応を見せる。

「何せ、椎名は戦線の中でも指折りの実力者で、野田程度なら瞬殺できるほどだ。
その椎名がいともたやすく殺されている。」

「不覚……」

「彼女の話だと、その仮面の男は刀を使用していたそうよ。それも、かなりの長物らしい

わ」

「けど、所詮は刀なんだろう？ 銃で弾幕張れば大丈夫じゃないのか？ 天使みたいに出鱈目なわけじやないだろ」

なあ？ と同意を周りに求める日向に、大山などはそ、そうだよね…？ と若干気弱な態度を見せながらも頷いた。

「けど、油断は禁物よ。天使みたいな例外が、あれだけとは断定できないんだから。それにそうでなくとも、椎名さんを圧倒できる以上、接近戦ではまず敵わないと考えるべきでしよう」

「仮に出会つちまつた場合はどーすんだよ」

「その時は、距離を取つて一方的に撃つしかないわ。ただ、椎名さんの話だと、暗殺者みたいに気配を断つっていたそうよ。暗殺なんてされたら、もう何もできないわね」

「意味ねーじゃねーか！」

「仕方ないじやない！ どんな奴なのかまだほんと情報がないのよ！ N P C用の制服を着てたらしいから他のメンバーを探してもらつてるけど、その成果も今のところはまつたくないわ」

ちゃんと探してるのかしら、と一人文句を零すゆり。そんなリーダーの様子に日向が苦笑していると、最近加入したばかりの新入りである音無が、日向の耳元に顔を近づけた。

「なあ、そいつつてそんなにヤバいのか？」

「んあ？ あー……そうだな。野田ついていただろ？ あのハルバード持つてた」

「ああ……百回殺されたわ」

「あれが瞬殺できるくらいには、椎名は強い。野田もバカだけど弱いわけではないんだがなあ。バカだけど」

何となく、ヤバさを実感した音無は、同時に野田によつて百回殺しをされた時の事を思い出して顔をしかめた。

「でも、これは戦線を強化できるチャンスでもあるわ！」

「バンッ！」と長机に拳を叩きつけたゆりは、そう言つてメンバーたちを見回した。

「まさかとは思いますが、仲間に引き入れると？」

「そのまさかよ。ほら、敵の敵は味方つて言うじゃない？ 実力も十分だし、戦線に入つてもらえれば戦力の強化は間違いないわ！」

「えっと、それって、その人が天使側に付くなんてこともあり得るんじゃないかな？ いままのところ、敵対したのつて僕らの方だけだし……」

「「「……」」」

勢いづいていたゆりであつたが、大山の一言で場が凍り付いた。

確かに大山の言うとおり、件の人物は天使と敵対していくわけではなく、更に言えば

先に襲い掛かったのは椎名である。

敵の敵は味方という言葉は、まさしく天使にとつての言葉であろう。「……と、とにかく！ 今夜はギルドよ！」

「A l r i g h t , l e t , s g o」

TKの言葉が、虚しく作戦本部に響いたのだつた。



そんなわけで、何とか戦線の捜査を潜り抜けつつ寮へと戻つた俺は、すぐさま気配を消して体育館へと向かつた。

今回は、念のために物干し竿も背中に背負つてきた。

「おお、引いてる引いてる」

体育館のキヤツトウォークに身を潜めながら見てみれば、ちょうどギルドへ向かう途中だつたようだ。

壇の下の収納スペースをTK、松下、高松の三人が引き出せば、その奥の床にはギルドへの入り口が見える。

戦線のメンバーが次々に降りていくのを見ながら徐々に日向のすぐ側に近寄つた俺

は、音無君と日向が下りるよりも先に地下へと降下した。

あの椎名曰く、俺がキャラたちの絡みを見て興奮すると気配遮断が乱れてしまうらしい。そのため、バレないように付いて行くためには、一定の距離をとつて追従する必要がある。

入り口はその難関箇所の一つだったので、とりあえずはクリアしたといつていいだろう。

足音も立てずに着地した俺は、全員が前方に気を取られている間に後方へと身を忍ばせた。

現段階で椎名に気づかれていないのなら、当分は安心できるだろう。

なんせ、俺がこうしてリスクを覚悟しながらここに来たのは、先日の俺と椎名の邂逅によつて原作にどう影響したのかを調べるためだ。

なのにここで俺の存在に気づかれてしまえば、それでこそ原作崩壊に繋がりかねない。それで音無君と奏ちゃんのエンドを見ることが出来なくなれば、俺は死んでも死にきれなくなる。いや、もう死んでるよなんて冗談は置いておいて、だ。

前方で野田君が登場し、EDをBGMに鮮やかなハンマーによる死を遂げたことで、

まだトラップが解除されていないことに焦りを見せる戦線メンバーたち。

天使が現れたというゆりの言葉に周りのメンバーが焦りを見せる。

しかし、ギルドが陥落すれば、天使に対抗することもできないため、仲村は進軍を決めた。

俺は、その後を距離を開けて追うのだった。



ギルド連絡通路B3

転がつてくる岩のトラップ

そもそも俺は岩が落ちてくる場所よりも後方にいたため、特に気にすることなく後を追つた。

あと、音無君の「これなのか?」、いただきました!

高松、脱落!

ギルド連絡通路B 6

部屋に閉じ込められる&レーザー
メンバーがトラップを抜けた後、有り余る身体スペック（無理矢理）を用いて扉を斬
り壊した。

途中で、松下五段（護躰）のさいつこうの切れ味のエツクスによつて死んでいる様子
を見てしまい、俺のSAN値がピンチになつた。
ありや、大山が吐いても仕方ないことやで

松下、脱落！

ギルド連絡通路B 8

天井が落ちてくるトラップ

落ちた後にそのまま通り抜けました。

TK、脱落！

ところで、飛んで行つて誰を抱きしめてやるのでしようか？

ギルド連絡通路B 9

床が崩壊するトラップ

大山が忘れてたよここはあああ!! という叫び声をあげて落ちて、戦線メンバーたちが宙吊りになつてゐるところを遠目で観察。

途中、原作の中で唯一といつてもいいちよつとエツチなシーンは、興奮を死ぬ氣で（もう死んでる）抑えつけながらこの眼に焼きつけた。
日向は、お疲れ様です。

大山、日向、脱落!

ギルド連絡通路B 1 3

水攻め

藤巻脱落（カナヅチ）

◇

連絡通路B 15

「……特に、原作とは変わりがない…よな？」

水中に身を潜めて、顔の上半分を水面から出す。

視線のその先には、生き残った椎名、仲村、音無君の三人の姿。
ここまで戦線にトラップを解除させて、安全に尾行してきたが、今のところ俺の知る話との乖離は全くないといつてもいいだろう。それも怖いくらいに。

強いて言えばあの椎名の警戒が強いようにも感じたが、現状何もアクション起こしてこないことを鑑みれば、まだ俺の存在には気づいていないはずだ。
ゆっくりと水の流れに沿って水中を進んだ俺は、三人から離れた場所に離水。N P C と同じ紺色の学ランを脱いで気休め程度に乾かしておく。

「この様子だと、前回の俺の影響はほとんどないと考えてもいいかもしねないな」
喜ばしいことだ、と少しだけ安堵して笑みが零れた。

やがて、遠くから「ああああああ!! 子犬が流されているううう!!」というお前ギヤ

グ要因だつた？ と耳を疑いたくなるような椎名の声が響くと、何かが水に飛び込んだ
ような音が聞こえた。

トラップであるぬいぐるみに引っかかった椎名が、入水したのだろう。

ここも原作通りだな、という安心と、椎名という一番厄介な存在が脱落することに安
堵する。

それがいけなかつたのだろう。

空気を切り裂くような音。

そんな違和感のある音を耳にしたこの体は、俺の意思を無視して愛刀である物干し竿
を抜刀して背後を斬つた。

直後、弾道がずれたであろう苦無が、俺のハサンの仮面を掠めていった。

「不覚!!ぬいぐるみだつたあああああああ!!!」

「……」

彼女は原作の様に滝壺へと落ちていく。

あのキャラがかわいいものが好きで、あんなトラップに引っかかる。その様子は、ま
さしくギャップ萌えだ何だと多くの人を魅了するのだろう。

実際、俺だつてその一人なのだ。

けど、飛んできた一本の苦無。それに俺は驚きを隠せない。つまり、彼女は俺の存在に気づいた、と。

「いつからだ……」

まさか、あの床崩壊のトラップで？

だがあの時の彼女は、仲間たちを支えるので精一杯だつたようにも思える。実はそうではなかつたのか？

「……本当に、何でそういうので気づかれるのかな。この気配遮断は」

元ネタ通りなら、俺が攻撃しようとしない限り気配遮断のスキルランクは低下しないはずなのだが、そこは俺仕様ということなのだろうか。

こんな無理矢理な小次郎さんをつけておいて、よくやつたもんだよ。

文句を垂れながら、ある程度水を切つた学ランを身に着ける。

「さて、進むか」

もし仮に、俺がここにいるせいで原作乖離が起きたのであれば、これ以上進むことは

原作崩壊に繋がりかねないこととなる。

だがしかし、だからこそ確かめなければならないことがあるのだ。

もし俺の存在によつて、何かしらのバタフライエフェクトが起きたのであれば、最悪の場合原作崩壊に繋がりかねないことが起きる。

それは、天使の進行だ。

彼女の進行が、何かしらの影響で早くなつた場合。それこそ、音無君らが到着する前にギルドへ着いてしまえば、凄まじい原作崩壊だ。最悪、ギルドが陥落して SSS 団が終わる可能性も出てくる。

別ルートからギルドへと向かう彼女は、すべてのトラップに引っかかりながら進行しているはずだ。

ならば、仲村が生前の事を語つている間に俺がギルドまで先行し、そこから別ルートへの道を逆走すれば天使の下に辿り着けるはずだ。

音無君たちがギルドへ到着した時点で、彼女は最後のトラップ手前だつたはず。もしその速度が、原作の物よりも速かつたならば。

「足止めするしか、無いよな……」

ちらつと、背中側に見える愛刀に目をやつた俺は、憂鬱だなとため息を吐いた。



天使ちゃんマジ天使……は、今は置いておかなくては。

「なんで、そういう嫌な予想は当たるのかなあ！」
「あなたは誰？」

キヨトン、という効果音でもつきそうな表情で首をかしげる生徒会長、立華奏。

生前では一ファンとして、その顔を音無君に向けて微笑んでほしいと思わざるを得ないが、現状、俺は引きつったように笑うしかなかつた。

「すいませんね。とりあえず、この先にはまだ行っちゃダメなもので」「そう。でも、私は行かなくちゃいけないから」

Guard skill Handsonic

そう呟いた彼女の制服の袖口から0と1のエフェクトが弾け、銀色の刃が出現する。
angel playerというものを使つて使用しているらしいが、その原理が俺にはよくわからない。

いつたい何者なんだ、angel player

だが、そう言つてもいられないだろう。

両腕の刃を構えた彼女に対峙する形で、俺も背中の愛刀を抜いた。

「暫く、俺に付き合つてもらうぞ」

ギルド降下作戦 下

油断なく愛刀である物干し竿を構え、その切つ先を目の前の少女へと向けた。

彼女の名は立華かなで。

この死後の世界の学園にて生徒会長を務める存在だ。

神に抗うSSS団のメンバーたちは、彼女を神の使いである天使と断定して日々戦っているのだが、彼女も死んだ人間であるため、現時点においての彼らの戦いは無意味なものだと言えるだろう。

まあそもそも、学生らしく過ごしていれば前世のある人間は消滅してしまう中、何十年と消えずに残っているかなでちゃんと見れば勘違いしてしまうことも理解できなくはない。特に、理不尽な死を許せなかつた彼ら彼女らにとつては。

だが、この世界における消滅の条件は学生として過ごすだけではないのだ。
前世の未練。

それが解消できた時、人はこの世界から消える。逆に言えば、その未練が残つていればいくら真面目に学生として過ごしていてもこの世界から消えることは無い。

立華かなでは、この後者に当たる。

刀を向けているはずなのだが、表情一つ変えることもなく俺をまっすぐに見つめているかなでちゃん。その瞳は、もう少し感情を込められるようになつたら音無君に向いてもらいたいものだ。是非ともね！

「ぜああつ！」

袖から飛び出でている刃を構えた瞬間に合わせて斬りかかる。

しかし、彼女はそれを避けることなく、片方の刃を頭上に構えて受け止めてしまった。
「やつかいだな！」

原作ではなく、そのSSS団創設当時の話において彼女が語ったパツシブスキルであるOverdrive

その効果は単純に身体能力の強化だ。

このGuard skillによって、彼女は日向を軽く振るつただけで吹き飛ばせたし、原作においてもすさまじい戦闘能力を発揮している。

筋肉痛やら筋断裂覚悟で相手にするのは嫌なんだけども！

もう片方の腕を振るつて斬りかかってくる彼女から、今度はこちらがバックステップで距離を取る。

振るう速度がすでに少女のそれではない件について。知つてたけども、こうして対峙して体験すると本当にとんでもないな！

着地と同時に前へと飛び出し、愛刀の切つ先を彼女の腹に向けて突き出した。

そもそも、今回は足止めが目的であるため、必要以上にかなでちゃんを痛めつけるつもりはない。今のこの状況でさえ本当に、本つ当たり仕方なくなるのだ。推しに刃を向けたのだ。俺はこの後、死んで詫びるべきかもしれない。

Guard skill Delay

……まあ、俺がかなでちゃんを相手に生き残ればの話ですがね！

瞬間移動によつて軸をずらし、刀の突きから逃れると、今度は彼女が両腕を構えて斬り込んできた。

ヤバッ、と口に出るよりも先に、俺の体は伸び切つていた腕の軌道を無理矢理変更。

とてつもない痛みに顔が引きつりそうになるが、体はかなでちゃんの背後に向けて刀を振るう。

しかし、そんな攻撃も彼女は簡単に凌ぎ、更には空いた方の手で突きを放つてくる。

狙いは……心臓！！

「こなくそ!!」

刀を振るつた勢いを利用して片足を一步後ろへ。

半身になつた体のすれすれを Hand—sonic の刃が抜けていくのだが、その際、浅く学ランを斬られてしまう。

そのハートキヤツチ（キヤツチはしていない）は音無君が相手の時だけにしてくれないかなあ！？

頭の中で散々喚きながら、接近していたかなでちゃんの腹を蹴り出した。

攻撃的なものではなく、距離を取るためのものであるため威力はないが、仕切り直すには十分な間が開いただろう。

かなでちゃんの方も空中で体勢を整えると、スマートに着地を決めていた。

刀を構えたままの俺と、両腕を下げ感情のこもっていない目を俺に向けてくるかなでちゃん。

お互いがお互いを見つめ合いながら、ただ時間が流れしていく。

なお、恋なんて生まれない。生ませるものか（使命感）

「……あなたは誰？」

「最初に戻るのかあ……」

あれだけ斬りかかっていた相手にこんなことを聞けるのは、流石というか天然というべきか。

しかし、その質問に答えるつもりは毛頭ない。

……いや、あえて名乗るのもいい案かもしない。

「俺の名前は、名無し権兵衛だ」

「ナナシ……そう、覚えたわ」

やはりこの娘天然が過ぎるのでないだろうか

「ああ、しつかり覚えてくれ。……つと、時間が」

自身のはるか後方に人の気配を感じた。おそらく、仲村と音無君がギルドに到着し、爆薬を仕掛ける間の時間稼ぎに出てきたのだろう。

なら、今回の俺の役目はこれで終わりだ。

これ以上、この場に居座つても意味はないだろう。

「それでは、これにて」

「あ……」

気配遮断を最大限に使用してその場を離脱する。

突然姿を消した俺に最初は少しだけ反応を見せていた彼女であつたが、しばらくすると再び歩を進めてギルドの方へと向かつていった。

その様子を後方から見ていた俺は、もう大丈夫だろうと地上への道を駆けた。

SSS団が地上へ戻るまでの間に、新しい学ランを新調しておかなければならぬ。

でなければ、N P C の生徒の学ランが斬られているなんておかしいと思われかねないからな。

「とりあえず、関わるのはここまでだな。……原作崩壊してないよね？」

何か、めちゃくちや心配になるが、今の俺には祈るしかできない為今後のS S S 団の動向に注意するしかないだろう。

「はあああ!! はやくくついてくれねえかなあ!!」

連絡通路を駆けながら、文句を垂れ流す。

早くこの目で、ゆづかなを見て尊死したいものだ。

死んでるけどね！



さて、それでは後日譚だ。

SSS団が変わらず活動を続けていることを鑑みるに、どうやら原作崩壊という最悪の展開は免れたようだつた。まあ、俺が少しでも介入している時点で原作のげの字もないのかも知れないが、最終的に音無君とかなでちゃんとが協力するようになればそれでいいのだ。

言つてしまえば、俺がこの世界にいるのもただの自己満足のようなものなのだから。

……そういえば、OVAとかでかなでちゃんとが卒業して音無君が生徒会長としてこの世界に残る可能性の話もあつたか。

できれば、かなでちゃんと共に卒業して現世で再開という、俺が尊死必須のキタコレ展開になつてほしいものだ。

だがしかし、もちろん俺の中での一番はゆづかなであるのだが、個人的にはひでゆいの結婚してやんよも大好物だ。第十話からそうやつて泣かせにかかるのつて本当に卑怯だなと思いました。

「……そういうや、ギルド降下作戦が終わつたつてことは、もう次なのか」

ふと思い出したのは、この後の話。

確か、Girls Dead Monsterのリーダーである岩沢がこの世界から消えるんだつけか。

彼女自身については、俺個人嫌いなわけではない。俺は環境的にできてないのだが、PC版のゲームでは彼女のルートがあつたという話は聞いている。

音楽狂いと言つてもいい岩沢という少女は、前世において、やはり理不尽な人生を送つているということは知つている。

しかし、俺がここで彼女の人生について説明しても仕方のないことであるため何も言うことは無い。

それに、俺自身、彼女がこの世界から消えることについては止めるつもりはない。

前にも言つたが、この世界に来てしまつた少年少女たちは未練を残して死んでいる。

そして、この世界で青春を送れば、やがて卒業とともにこの世界から消えるのだ。

だからこそ、SSS団の面々はそうならないために授業にも出ず、日々神に抗うため天使と称するかなでちゃんと戦つているわけだ。

しかし、岩沢が消えることでその前提が覆されることになる。

そして音無君が、未練を解消すればこの世界から「卒業」できるということを知るきつかけになる話……だつたはずだ。何分、細かいところまで覚えている自信はない。

それに、今回の作戦はガルデモを陽動とした天使エリア侵入作戦だ。つまるところ、女子寮にあるかなでちゃんの部屋への不法侵入である。

確か、竹山クライストが登場する回もあるな。

』

……さて、そんな感じで色々と思考を巡らせていたのだが、なかなか相手もしつこいらしい。

意識して聞かないようにしていた放送。俺は机に突つ伏して寝たふりを続けていたのだが、体勢はそのままに耳だけを傾ける。

『ナナシゴンベエ工さん。今すぐ生徒会室まで来てください。繰り返します。ナナシゴンベエさんは――』

各教室に響く生徒会長、立華かなでの声。どうやら、彼女は放送室からわざわざこの放送を流しているらしい。

『生徒会長。恐らくですが、その名前は偽名だと思うのですが?』

『…そう?』

先ほどから何回も何回も呼びかけるかなでちゃんと痺れを切らしたのか、副会長である自称神、直井がかなでちゃんと正解を教えていた。

休み時間になるたびに教室から出て行つてはこの放送がかかるこちらの身にもなつてもらいたいものだ。直井には是非ともかなでちゃんと連れて帰つてきてもらいたいものだな。

だが、まだまだ序盤ではあるものの、原作は大きく乖離しているわけではない。

このままいけば、無事かなでちゃんとSSS団も和解し、俺の見たいエンドも見ることが出来るだろう。

それまでは気が抜けないな、と教室に戻ってきた生徒会長かなでちゃんとを見ながらひつそりと笑うのだつた。

DAY GAME 上

ここ最近の出来事といえば、ガルデモの岩沢が消えたことであろう。

天使エリア……まあ要するにかなでちゃんの寮の部屋に侵入するミッショングの際、その囮役を担っていたガルデモの彼女らは、乱入してきた教師のN P Cによつて取り押さえられた。

そこからは記憶にある原作と一緒に。一曲歌つたあと、岩沢はギターを残して消滅したわけだ。

しかし、俺もその場にいたわけだが、消えるときは本当に突然消えるらしい。英霊が消滅するように光の粒子となるわけでもなく、気がつけばいないのだ。音もなく消えるというのは、ああいうのをいうのだろう。

さて、この岩沢の消滅を機に戦線の多くは、卒業以外にこの世界から消える方法があると判断するわけだ。

学園生活を眞面目に送らずとも、消えることがある。その事実は多くのメンバーに衝撃を与えたことだろう。高松加入の際にいた初期メンバーは見たことがあるかもしないが、まあそこはいいだろう。

大事なのは、この岩沢の消滅の理由を音無君が知ることなのだから。

そういう意味では、まあ申し訳ないという気持ちもあるのだが、岩沢が原作通り消えたことにホツとしている部分はある。

最近、原作通りにいかないんじやないかと不安になつていていたところだ。一つの壁を乗り越えた今、今日は安心して寝ることができるだろう。死後の世界で寝不足なんてあるのかは知らないが。

ワイワイガヤガヤとしている教室の中、窓の外を見てみれば、グランドでは野球の練習をしているNPCたちの姿がチラホラと伺える。

そういえば、もうすぐ球技大会の時期かと思考を巡らせ、俺自身がどう動くかを考える。

まあさしあたつて特に重要な話ではないのだが、高校野球の未練が残る日向が消滅するかもしれないのに注意はしておくべきだろう。彼には、最後まで残つてもらわなければならぬのだから。

そこまで考え、あつ、と声が漏れた。

「…そいや、ボーカルが変わるのもこの時期か」

消滅した岩沢に変わり、ガルデモのボーカルを務めることになるのは彼女のファンで

もあつたユイ。苗字は知らん。

今回から戦線のレギュラーとなる彼女は、良き日向のパートナーだ。日向と同じくギヤグキヤラじみた少女であるが、戦線メンバーと同じく、彼女もそういう前世を経験しているのだ。

あのやんよで、グツとこないやつがいるのだろうか。いや、いない。

だが日向に関しては、彼女がいればある程度は安心できるだろう。勝利のかかった一球をふいにしてまで、日向にキックをかますような少女なのだから。

閑話休題

とりあえず、球技大会だ。

戦線の目的は、大会にゲリラ参加し、優勝することでかなでちゃんたちを正攻法でギヤフンと言わせること。

まあゲリラ参加の時点で正攻法もクソもないのだが、重火器などを使った暴力でない分だいぶマシだろう。

もつとも、後から生徒会が野球部レギュラーを引き連れて参加し、戦線チームを蹂躪していくのだが。

死よりも恐ろしい罰ゲームを回避したい彼等には合掌するしかない。頑張ってくれ。

そして今回の俺の方針であるが、恐らく大会に参加することもないだろう。参加した

ところで、どうということでもないのだ。

だが、参加はせずともることはある。

もうすぐ授業が始まるがそこは無視。優等生を気取っているわけでもないので、気にすることはない。音無君とかなでちゃんのイチャイチャがあるのなら、全てを投げ打つてでも見に行くぜ、俺は。



「確か、体育用具の倉庫だった気がするんだが…」

気配遮断を十全に使用し、外を散策する。

一般生徒が授業中に外をうろついてるわけがない。姿を見られてしまえば、一発で人間だと気づかれるだろう。

いつもの白い骸骨の仮面を装着し、倉庫らしき場所を目指す。

今回は彼女と話をするつもりだ。

基本的に作戦本部である元校長室以外ではどこにいるかもわからない彼女が、めずらしくそれ以外の場所で一人でいることが確定しているのだ。この機を逃してしまふと、次がいつになるか見当もつかない。

二人で会うなら、今回しかない。

この接触が、どう影響するか俺もわからないが、こと彼女に至つては既に原作からずれた行動をしているのだ。今更であろう。

「……つと、ここか」

用具倉庫らしき場所についたため、そつと中へと侵入する。

少し埃っぽく、小さな窓からしか光が入らない倉庫の中、彼女はいた。

……右手に箒を立てながら。

「……そういう、そんなことしてたな」

確か、降下作戦で新入りの音無君に遅れをとつたのは集中力が足りなかつたからだ、と降下作戦の日からずつと箒を掌の上に立て続けているのだとか。

ユイがアホなんですねというのもわかる。彼女もアホではあるが。

「……！ 貴様か。何の用だ」

気配遮断の効果を弱めると、途端空いた左手で小刀を構えた彼女は、俺の姿を視認する構えたまま問うてきた。

「話し合いいだ。敵意はない」

「……信用するとでも？」

両手を上げて武器がないことを示してみせるが、あまりうまくいっていないようだ。

「ならば仕方ない、そのまま聞け。俺はお前たちを害する気などない。いちいち警戒するのやめろ」

「それこそ信用できるわけがなかろう。それに、一度ならず、二度までも私達を監視していた貴様がそれを言うのか。あさはかなりもつともなご意見で。

「俺にも目的がある。その目的のためには、お前たちを見張らなければならない。それだけだ。危害を加えることはないと誓おうじやないか」「ではその目的は何だ」

「……それはちょっと」

「ならば信用なんぞできるわけがないだろう」

「ごもつともで!!」

しかし困つたことになつたぞ……武器を持たないことで誠意を示し、危害を加えないということを信用してもらおうと思つたのだが、そもそもそこまでいけてないんじやが？

「でもなあ！ 目的話すのもなあ！」

「音無君とかなでちゃんのイチャイチャを最後まで見たいんです」なんて絶対に言えるか！ ボケ！

どうする？かなでちゃんが仲村たちと仲良くする前に戦線入っちゃう？

無理だよこんちくしよう。まだ椎名としか接触していない今ならともかく、戦線全員と関わることになればどんな影響があるか見当つかねえ。

加入するのは最低でも川釣りの話で増殖したかなでちゃんが出てきてからだ。

「……ともかく、言いたいことは伝えた」

くそ、こうなるんだつたら、話になど来なかつたぞ。

ではな、と椎名が襲いかかつてこないことを確認しながら倉庫を後にする

……はずだつたんだがなあ

「おーい、椎名つちく。いるか？」

正面から入つてきた3人組。

椎名を相手にしていて外から来る者に注意を向けていなかつた。

突然響いた声に焦つた俺は、倉庫から出ることなく、気配遮断を使用して倉庫の奥へと隠れた。

日向、音無君、ユイの3人である。原作にもあつた椎名を野球のメンバーに誘うのだろう。

よりもよつて今日なのか。昨日のうちにここにきて、いればよかつた。

奥から四人の様子を見ていると、日向たちは椎名の勧誘に成功したようだ。

戦力の確保に喜ぶ三人は、そのまま椎名を引き連れて他のメンバーを勧誘しに行くようだ。原作通りなら、次は野田だろう。

ここで出て行くならまあそれはそれでいいだろう。話も終わるというもの。

しかし、そんな俺の予想に反して椎名は動いた。

「すまないが、私は後で合流させてもらおう。ところで日向。メンバーに当てはあるのか？」

「あつたりまえだ！この俺の人望、なめんじやねえぞ？まあでも、人が多いことに越したことはないぜ」

「さつき断られてたけどな」

それをいうなよおー！と音無君に突つかかる日向。

しかし、俺はそれどころではない。

まだだ

また、椎名が原作に沿わない行動を起こした。

何のつもりだあいつ、と恨みがましく彼女を見ているとそれに気づいたのだろう。日向たちと別れた彼女は俺のいる倉庫内へと引き返し、敵意が漏れているぞ、と忠告して

きた。

相変わらず、役に立つようで役に立たない気配遮断だな。

「……何のつもりだ」

「？ よくわからんが、私の信用が欲しいと言ったな、お前は」

一瞬首を傾げていた彼女は、徐にそう言つた。

「……まあ、こちらがお前たち戦線と敵対することはないと信じてもらえればそれでいい」

「なら取引だ。こちらの要望を呑むのなら、その言葉を信じよう」

……どういうことだ？」

椎名が原作に沿わない行動をしたこともそうだが、俺に取引を持ちかけてくること自体意味がわからない。

「一応、聞いておこう」

「私たちのチームに入つて大会に出ることだ。恐らくだが、あの男は人数を集められないだろうからな」

あの男、というのは日向のことだろうか。本当に人望があるのか謎である。

「……その取引を、俺が受けるとでも？」

受けないなら受けないでそれでいい。今後も変わらず、お前を敵として扱うだけだ

今更ながら、少し話しそぎたと思つてゐる。

こいつ、俺がそう扱われることを嫌がつてゐるのを利用してマウントを取りに来やがつた。

焦りすぎたか……ともあれ、やつてしまつたことを後悔しても仕方ない。それに、受けることに関してもメリットはある。

こいつさえ俺を気にしなくなれば、俺の影響はぐつと小さくなるはずだ。それに、俺の存在自体は骸骨の仮面の男としてバレているため、ここで協力しておけば仲村にも敵と認識されることはない…はずだ。

「条件をつけてもいいならば受けよう」

「言え」

「俺の正体について言及しないこと。そしてこの大会以降で約束を守ることだ」

基本的にこれさえ守ってくれれば、こちらからの干渉はない。なんたつて俺は傍観が目的なのだ。下手に手を出すつもりはない。

それに、時期を過ぎれば加入も考えていないわけではないのだから。
「わかった。それでいい」

「しかし、お前が自分で取引を持ちかけてくるとは思わなかつたよ。リーダーに確認を

取らなくて良かつたのか?」

「大丈夫だろう。ゆりの命令は「優勝しろ」だからな。その目的の達成のためにお前を利用するだけだ」

それに、と彼女は続ける。

「……死よりも恐ろしい罰ゲームは、私も受けたくはないからな

「そんなになのか」

原作では言われてなかつたが、いつたい何があるんだよ罰ゲーム怖いよ。
そりや、必死になるわな。



「というわけで、戦力を連れてきた

『……』

「あー……椎名つち？」

「? どうした」

「いやあのさ、連れてきたつてお前……」

チラリとこちらを見る日向に軽く会釈すると、相手はあ、どうもと会釈を返した。

「戦力だ」

「いや、そこじやないだろお!? 何でこんな如何にも怪しいですって格好のやつ連れてきたの!?!?」

『失礼な』

『しかも筆談つ?』

わーわーと喚いている日向はさておき、現状の説明でもしておこう。

今俺は、身バレ防止のため、演劇部の小道具にあつた顔全体を覆うマスクを着用している。気分はプロレスラーだ。

あと、声から判別されても困るので会話は全て筆談で行なっているのだ。

何この人、みたいな視線が少し痛いです。

「安心しろ。実力は確かだ」

「いや、そんなこと言つてもよお……第一、あいつ人間だろ? 生きてた記憶のある」

「悪いが、詮索しないことを条件にされている。聞くんじゃない」

『ゞゞゞく一般的なN P Cですが、よろしく（？△？）ノ』

「N P Cはそんなこと言わねーよ！あと、顔文字ウゼエ！」

しまつた、つい原作のキャラと普通にお話ができたことに浮かれていたようだ。
もう少し引き締めなければ

『黙れ』

「急に辛辣!?」

すると、「おい」という言葉とともに、俺の首元に向けて刃を突きつけられた。
「どこのどいつかは知らねーが、ただの雑魚なら要らんぞ。ゆりつペの作戦を邪魔する
だけなら、この俺自らが始末してやる」

「おいやめろっての」

そのハルバードの柄を音無君が掴んで咎める。

野田は邪魔するなど反抗するが、音無君はそれに屈さず庇ってくれていた。

推しの一人が……俺を……

『ケフッ！』（吐血）

「何で今吐血したの!?」

「アホですね」

何が何かわかつていなユイのファンであるN P Cたちはおろおろとするばかり。

なんともカオスな集団が出来上がつたものだ。

しかし、人数はこれでジャスト九人。原作で一人足りていなかつたが俺が入つたことでその穴が埋まつてしまつた。

しかし、取引はしてゐるし、俺もここで正体を明かすつもりはない。予定通り、最後まで勝ち抜いて生徒会チームに敗れればそれでいいのだ。

「おい、マスク！大丈夫か！？」

『尊死』

「マスクウゥウゥ！」

「みんなアホですね」

まあそんなわけで、球技大会スタートである。

DAY GAME 下

余談ではあるが、これでも生きていた頃には野球をやつていたことがある。

まあ、高校入学とともに辞めてしまったので毛が生えた程度かもしれないが、動き自体はそれなりに、といったところだろう。使用される球も軟式のようなので問題はない。

体の節々をゆっくり伸ばしている間に、日向が審判役の学生NPCにゲリラ参加の有無を伝えていた。

今日何度目だよ、と呆れるNPCに対して、日向は俺たちも生徒なんだともっともらしいことを述べて交渉。NPCからすれば、不良が楽しい学校行事に乱入してきた、みたいな感じなのだろう。改めて考えると、迷惑この上ないな。

しかし、正規の手続きで参加してしまうと消えるファクターとなりかねないため、ゲリラ参加するしかないのだろう。

あと、日向のすぐそばでシャドーボクシングをしているユイはやはりアホなのではなかろうか。

違つた、アホだつた。

あまり関わりのない人に対してもアホアホ言うのは失礼なのかもしれないが、罪悪感が湧かないのはこれ如何に。

結局、NPCが折れる形で俺たちの参加が認められた。

「おーし、んじや打順と守備位置決めていくぞ」

このメンバーの中で唯一であろう高校野球経験者日向が、ポンポンとオーダーを決めていく。

そして、決まったのが以下の通り。

1番	投手	音無君
2番	二塁手	日向
3番	遊撃手	椎名
4番	捕手	野田
5番	一塁手	ユイ
6番	中堅手	マスク

7番、8番、9番はユイのファンであるNPCが入る。まあ三塁は椎名が対応していくはずなのでいいだろう。筹待つてること。

問題は右翼左翼の守備とファーストだな。

ユイがファーストだと、内野ゴロもポロリ（そういうのじゃない）してセーフになりそうな気がするんだが。

音無君の負担がハンパないと思うのは俺だけですか？日向、おめえ野球経験者なんだよなあ？

まあ、ここでそうして文句を言つても仕方ないだろう。事実、原作では俺がセンターラインに入つた以外は同じ構成で決勝までいつたのだ。信じるしかないだろう。それに、椎名から提示された条件は「チームとして試合に出ること」だ。勝敗までは気にすることはない。なんなら、わざと早々に負けてしまつてもいいとさえ思つている。まあ、それをやつたらやつたで違う方面から面倒なのが来そうなのでやらないが。

カキンツ、という小気味のいい音と共に、先頭打者である音無君の打球が相手投手の横を抜け、あわやセンター前！というところに野田登場。ハルバードとバットによる打ち合いがスタートし、結局音無君はアウトに。

『なあ、あいつら何してるんだ？』

「……俺にもわかんねえ

「アホですね☆」

隣で項垂れている日向と可愛子ぶつていうユイの二人。

椎名は相変わらず話すことはなく、竹箒を手に立てていていただけだった。

だが、音無君がアウトでもあとツーアウト取られなければチエンジにはならない。というわけで、日向、椎名が墨に出たあと、野田がブツパしてホームラン。椎名もうだけど、なんでそんな打ち方で球打てるわけ？

続くユイは予想通り三振を決め、これで二死。ランナーなしの状態で俺というわけだ。

左打席に立ち、相手の投手を見据える。相手からすれば、怪しいマスクマンが凝視してくるわけだからたまたまものではないだろう。

◇

「さて、お手並み拝見といこうじゃないか」

打席に立つマスク姿の男を見やつた野田は、腕を組んだまま偉そうにそう言った。

そもそも仲間でない奴が入っているのだ。そいつのせいでのゆりつペの作戦が失敗することにでもなれば、彼からすれば許さないことなのだろう。

「そうだな……ところで椎名っち。あいつ、どれだけできるんだ？」

打席の入り方やバットの構え方から見て、恐らくは野球経験者であろうと当たりをつけた日向は、そのマスクの男を連れてきた本人にその実力を確認する。経験者であつて

も、勝利に貢献できるほどの強者とは限らないからだ。

未経験者の女子生徒N P Cを三人も抱え込んでいる時点で説得力は皆無だが。

「知らん」

「まじかよ。じゃあなんで連れてきたんだ……」

「まあ人数は足りてなかつたんだから、結果オーライだろ」

連れてきた本人でさえわからないと答える椎名に、日向は顔に手を当てた。しかし！音無の言つた通り、マスクの男がいなければ八人で参加することになつていたことも事実。あのマスクの男に文句は言えないだろう。

「それに戦力になる、といったのは間違いではない。あの男は、少なくとも私よりは強いからな」

その言葉で、ユイ以外の戦線メンバー三人が驚愕と共にその視線を打席に立つマスクの男に向かってた。

N P Cの男子生徒用である紺色の学ランを身につけたマスクの男。

その男が戦線の中でも屈指の戦闘力を持つ椎名より強いという。

野田は少し足が震えていた。

「なあ、椎名つち。あのマスクの男つてもしかして……」

「詮索はするなというのが条件だ。まあとにかく、戦力としては十分だろう」

椎名の視線の先。

打席のマスクがバットを振れば鋭い打球が右中間（センターとライトの間）を破つていく。

ホームランにこそならなかつたが、外野のフェンスを直撃した打球は跳ね返り、そしてライトのグラブの中へと収まつた。

これ幸いと、急いで内野の中継に投げようとしたライトの生徒であつたが、ライトを含め、マスクの男を見ていた誰もがその目を見開いた。

ランニングホームラン

スタンドヘインするホームランと違つて、打球が転がつている間にベースを一周するホームランのことである。

悠々と一周するホームランと違い、一周するだけの早さがいるため容易ではない。容易ではないのだが、このマスクの男はやつてみせた。

「そら、十分だろう？」

啞然とする日向をよそに、椎名はそう言つてフツと笑つた。



フハハハハ！アサシンの敏捷を持つてすれば、この程度のことなど朝飯前！気分はまるでスピードスター！

いや、まあうん。正直ちょっとやりすぎたかなあとはおもう。けどしゃーないやん。戦闘方面ならともかく、スポーツで力発揮したことなんかなかつたんだ。ちょっと試しに、程度で使つたらこれだよ。

自重しよう（戒め）

相手のキヤツチャーが化け物を見ているんじゃないかと思えるような目で俺を見ていたが気にせずホームベースを踏む。

『一点とつたぞ』

『軽いなつ！？』

ベンチに戻ると、誰も何も言わなかつたため、とりあえず事実をあげてみたんだが返つてきたのは日向のツツコミのみ。

『韋駄天と呼んでくれ』

「にしても速すぎるぞお前……まあいい、このままコールドでカタをつけるぜ!!」

しかし、気をつけるつもりだつたが思いのほかはしゃいでいたのだろうか。
しかし、考えてみればメリットもある。

取引そのものは椎名との個別のものであつたが、今回の件を知つた仲村が敵意のない、それでいて椎名を殺せる相手とわざわざ敵対するとは考えられない。あのリーダーは、そこまで愚かではないだろう。うまくいけば、俺を無視して今後の作戦を実行してくれるはずだ。

干渉があつたとしても、それは勧誘程度に抑えられるだろうし、そうなつたとしても今このこれは顔も声も見せていない状態だ。NPCに紛れてしまえば、見つかることもないだろうし問題はない。

「なあ、ちよつといいか」

そこまで考えていると、ふと、俺の隣から声がかかつた。
この声、まさかまさか……

『はいなんでしょうか!!』

「なんか、テンション高いな……えっと、何であなたは今回チームに入つてくれたんだ?」

あんたは、普通に学園生活を送つていたんだろ?」

……ふむ、つまり普通の生徒としてこの学園で生活する俺は、戦線と一緒にいる音無

君にとつては珍しい存在なのだろう。

まあ原作において、生きていた記憶のある人間でN P Cと共に学園生活を送っているのはかなでちゃんと直井しかいない。この時点では、そのことを知らない音無君にとっては、俺は理解ができないのだろう。

何故、仲村たちのように抗わないのか、と。

もつとも、俺の予想であつて正しいとは言えないが。

『目的がある』

「目的？」

『ああ。そのためにあの女と取引をしたんだ。チームに入つたのも、それが条件だつたからな』

できれば色々と話したい。しかし、そうしてしまつとこの先で致命的なズレを生じさせる要因になりかねない。なので、泣く泣く会話を切り上げる。

それに、俺の目的が「君とかなでちゃんのイチャイチャを見たい」とか本人前にして言えるわけがない。

結局、この回の攻撃は俺の後のN P Cの女子生徒が一回もバットを振らずアウト。交

代となつた。

「お、やつと天使のお出ましだぜ」

そういう日向の視線の先には、野球部のレギュラーであろう奴らを引き連れた生徒会チームがいた。

副会長の直井が何やら色々と言つて挑発にも聞こえることを述べているが、俺は今それどころではないのだ。

音無君とお！かなでちゃんとあ！戦う内外で一緒にいるよお!!

『ハアアアア!!』

「おい、いきなりどうした？」

『何でもない』

危なかつたぜ……マスクがなければ即死（尊死）だつた……

にやけそうになる頬を引き締める。落ち着け、俺。ここは我慢だ。ここを乗ら切れば、戦線を気にすることなくいくらでも二人のイチャつきを傍観できる：!!

生徒会チームが去つてからはまた大会で快進撃を続ける俺たち。他の戦線のチーム

もそれは同じなようで、張り出されているトーナメント表を見る限り順調なようだつた。

しかし、生徒会チームが蹂躪を開始。戦線チームはコールド負けという結果を突きつけられ、とうとう残つたのは日向が率いる俺たちのチームのみとなつた。

……で、先頭バッターは俺ですかい

「頼むぞーマスク！ランニング決めてやれえ！」

「凡退などすれば、俺が殺してやるからな！！」

男二人の声援に辟易としながらも、バットを構えた。

とりあえず、ここは勝つ必要もなし。やるべきはギリギリの接戦で最終回を迎えること。

まあ、松下が入るはずが俺がいるため、全く同じとはならないかもだが、できるだけの努力で原作に近づけよう。

野球部のエースによる一投がくる。まずはストレートがアウトコースギリギリに決まつた。

「打たねーと俺の得物の鎧にしてやる!!」

うるさいなーのだー

打たないこともないが、とりあえず様子見で粘るくらいはしてやるとしよう。相手エースが振りかぶり、第二球を投げる。球種は同じくストレート。手が出ないと思われているのだろうか。

まお、追い込まれるまでは振らなくていいだろう。

「頼んだぞ！マスク！」

わかりました音無君!!

白球は、スタンディングした。

尚、それ以降敬遠で守備以外の活躍はなかつた。



さて、後日談だ。

最終回、上手いこと原作と同じように進んだ展開は、これまた原作と同じように終結

した。

ユイによる日向への隙ありドロップキック→日向によるユイへのコブラツイストまあそれによつて、日向の消滅を防げたと考えるならあの負けは意味のあるものだつたのだろう。俺は知らんけど。

俺としては、流れが大方原作のようにいつたことに安堵するばかりだ。

そして最も大きな収穫は、椎名との取引が成立したことである。これによつて、俺に敵意がないことの証明を行えたわけだ。今後、戦線の活動を傍観する中で椎名による攻撃を警戒する必要がなくなつたと言つてもいい。

勝つたな

憂が晴れると、こんなにも気分がいいものなのか。刀の手入れの方法などわからないうが、それでも布で拭くくらいはできるだろう。

立てかけてあつた物干し竿を取り、その刀身を優しく柔らかい布で拭っていく。さて、続いてはテストのイベントになるだろう。しかし、そこで俺がやるのは戦線の邪魔をしないこと。

この作戦によつてかなでちゃんと生徒会長を辞任することで話が進展するのだ。可哀想にも思えるが、俺は心を鬼にして耐えようじゃないか。

Favorite Flavor

試験前日となつた今日この頃。

俺は同室となつてゐるNPCが必死になつて机に向かつてゐる様子を尻目に、ベッドの上でゴロゴロと横になつていた。

なお、俺のベッドは二段目。上からその様子が良く見えるのだが、目を向ければそれに気づいたNPCが恨みがましくこちらを向いたので大人しく顔を出すのをやめた。

基本的に彼が俺に対して話しかけてくることは無い。それはそれでありがたいのだが、物干し竿を持ち込んだ時にはかなりびっくりされたものだ。

だがしかし、誰にもこのことを言わないようにちゃんとお話しすれば理解してもらえたため、特にこれといった問題はない。

……あれ、もしかしてコミュニケーション取つてこないのはそれが原因だつたり？
まあいいか。

そんなことは音無君とかなでちゃんの前には塵芥も同然である。

俺に被害がないのなら気にすることもない。

「しつかし、テストねえ……」

SSS団による、かなでちゃんを学年最下位に落とすという普通の学生にとつては鬼畜じみた作戦がいよいよ明日から決行される。

見ている側とすれば大変心苦しいものであるが、俺にはどうすることもできない為仕方ないと諦めるしかない。
それよりも、重要な問題は作戦そのものが俺のいるクラスで実行されるということだ。

俺とかなでちゃんはクラスメイトとも呼べる間柄だ。アサシンとして対峙したことはあるつても、山野直樹としてはクラスが同じだけの存在。当然ながら、生前の記憶がある者達にとつては、ただのNPCのようなものだ。そうなるようにふるまつてきたから当たり前なのだが。

はつきりと言おう。

あの混沌としか言いようがないあの話を、鉄仮面で乗り切る自信はない。

席位置によつては、少しでも噴出した時点で戦線の誰かに勘付かれる可能性もある。やばい、以外の言葉が見つからない。

もちろん、仮病を使ってテストそのものを休もうとも考えたが、そもそもこの世界では誰も病まない為意味がないし、サボつたらさぼつたでNPCの行動ではない為どちら

にせよバレる。

となると、テストには参加せざるを得ないのだ。

「ふむ……問題しかないんじゃが？」

一人だけテスト中……正確に言えばテスト終わりの回収時に、笑つてはいけないをやらなければならないという拷問。

彼らが頭を必死にこねくり回して考えた渾身のギヤグはまだいい。耐えられる。だが問題は仲村によるフォロード。

飛んだり、きりもみしたり、しまいには窓の外へ飛び立つたり。初日の日向高松の二人に関しては知っているから耐えられるかもだが、原作では明記されていなかつた初日以降は対策のしようがない。

俺の頭の中だけでBGMが流れたら笑うかもしれない。

「やつかいな……どうしろというんだ」

「お、おい……べ、勉強中なんだ。せ、せめて静かにしてくれよ……」

「あ？」

「ヒツ……！」

声がしたのでベッドの下に目を向けてみれば、その主は小さな悲鳴を口から漏らして身を竦めた。

独り言がうるさかつたのだろう。明日がテストであることを考えれば、ストレスや緊張から文句の一つでも言いたくなるのかもしない。

……しかし、そんなにおつかなびっくりしなくてもいいじゃないか。

「なあ。何でそんなに怯えてるんだよ」

「お、お前が初日に、そ、そこの刀で脅してきたからだろ!？」

「脅したつて……人聞き悪いな。ただ、邪魔しないように言つただけだろ?」

「それで首筋に刀向けられる意味がわからんねえよ!? もう嫌だよこいつとの部屋!!」

凄いだろ? これでN P Cなんだぜ? 現世におけるゲームでも、ここまでのを実現しようとすればどれだけ技術が進まなければならぬのか。

「まあ、お前が変に騒がないならそれでいいさ。悪かつたな、勉強の邪魔して」

「もうなんなんだよこいつ……」

N P Cとはいえ、人の姿をして人と同じように生活する相手だ。邪魔をしてしまったことに関しては多少の罪悪感があつた。

俺はそれ以降、頭の中で明日の予定について思考を巡らせながら寝転がつた。

その日、俺の部屋が消灯されたのは日付が変わつてからだつた。



翌朝

見た目だけは周りのN P C達と同じように教科書を開き、勉強している風を装つていると、教室の後ろの扉がガラガラと開いた。

入つてきたのは、俺も知らない S S S 団の制服であるブレザーを身に纏つた大柄な男子生徒。

その男子生徒が椅子と机を重ねたセットを教室の中へと運び入れると、その後ろから S S S 団のリーダーこと仲村が入つてきた。

その後には、男子生徒と同じように机と椅子を運び入れてくる音無君、日向、高松、大山、竹山が続く。

違う制服姿の集団が椅子と机を運んでくるという、テスト前の光景にしては異様な気がしないでもないが、教室にいるN P C達は特に気にした様子もないため、俺もそこは気にしなかつた。

しかし、原作の時から気になっていたが、足りない席はああやつて持つてきていたのか……。

頑張つてください、と言い残して大柄な男子生徒が教室を出ていつてから十数分後。このクラスの担任である教師が箱と共に教壇に立つた。

どうやら、席決めを行うようだ。

さあ、最初の難関だ。

ここで俺がやつてはいけないことは、作戦実行で重用となるかなでちゃんの前の席を引かないことだ。ここを引いた瞬間、原作もクソもあつたものではない。

なので、今回はかなでちゃんと含め、戦線のメンバーが引き終わるまではくじを引かないことにした。原作通りに進んでくれるのなら、ここで下手に俺が先にひいて彼らの番号を引いてしまうことは避けておきたい。

生徒が半分くらいくじを引いたところでかなでちゃんと動くと、それに続いて戦線も動いた。

廊下側前から二番目の37番。原作通りだ。

思わず誰にも気づかれないように拳を握った。あとは、戦線が引いてくれれば万々歳

である。

あの前の席を狙いなさい、という仲村が指示を出しているその後ろに並んだ。

「何で誰も引けてないのよおおお!!!」

仲村の怒声が教室中に響き渡つたが、周りのメンバーたちがくじだから仕方ないとなだめていた。

まず いま まず いま まず いま まず い!!!!

そして俺の心の中も荒れていた。

手にしたくじに書かれていた番号は36。かなでちゃんの前の席だ。

「……くうつ」

叫びたい衝動に駆られたが、それを意地でも食い止めた自分を後でほめてやりたいところだが、褒める前にまずはぶん殴らなければならないだろう。

あと、原作どおり36を引かなかつた竹山も暗殺してやる。

しかし、これは本格的にまずいことになつた。

本来なら、この番号は竹山が引き当て、作戦の要となる答案の入れ替えを行ははずなのだ。しかし、俺がこの番号を持つていて以上、それは叶わない。戦犯である。

どうする!? どうすればこの窮地を何とかできる!?

焦るなよ……まだ全員引き終わっていないんだ。考える時間はある……!

すると、戦線メンバーの方にも動きがあつた。

なんと教室にいるNPC達に声をかけ、席番号の確認を行つていたのだ。目当ての番号があれば、交換する気なのだろうか。

何にせよ、ナイス判断だ。

俺は彼らの行動に乗つて、こつそりと竹山の側へと移動する。

「すいません。あなたの席の番号を聞いても良いでしようか?」

先程の男子生徒とのやり取りを終えた竹山が、すぐ近くにいた俺に対して声をかけて

きた。

焦らず、一般生徒であるNPCを装いながら、俺は「なんで?」とだけ返す。

「実は、席を変わつていただけないかと思つていまして」
ここで即答していいよということは簡単だ。

しかし、二つ返事でオッケイを出してしまふと、NPCらしい行動ではないと疑われる要因になりかねない。

了承するつもり満々であるが、慎重にせねばならん。

「えつと、席を変わる必要はあるのか?」

「目当ての席にならないと、僕ごと爆発させられかねないですからね……」

チラリと彼が見やつたのは、教室の窓側一番前でふんぞり返つてゐる戦線リーダー仲村。人の椅子の下に推進エンジンなんぞを積んでくるような奴だ。本当にやりかねない。

高松の悪魔のような人、という言葉もあながち間違つてはいないだろう。

やはり、戦線には入らないほうが良いのではないか?

「そうか……それは大変だね……」

なんとか絞り出した返答に、彼は「ええ」とだけ答えた。

「そ、そういうことなら変わつてもいいよ。お目当の席かはわからないけど、役に立てれば何よりだ」

「ええ、どうもありが……！」 ありがとうございます

番号を見た瞬間、かなでちゃんとの方を見たかと思えば、彼は改めてお礼を言つた後急ぎ足で仲村の下へと戻つていった。

「よくやつたわ！ 竹山君！」 という仲村の元気な声が教室に響いていた。

なお、クリエイストという名前では呼ばれていない模様。

「さて、俺の席はどこになつたのか……」

渡された紙を見てみれば、そこに書かれていたのは32という数字。

張り出されていた座席表を確認して荷物もまとめて移動する。

日向や高松のいる窓側から離れたこの席であれば、彼らが I can fly したところで問題はないはずだ。

「おいそこ！ 早く席に着かんか！」

ないはずだ。

……ないはずだ。

……ない、ないは……

ナカムラ 8

15

22

29

タケヤマ

タカマツ 9
10

音無君 23
24

↑
オオヤマ 30
31

かなでちゃん 38
39

7	6	5	4	3	2		
14	13	12					
21	ヒナタ	19	18	17	16		
28	27	26					
35	34						
42	41	40					

あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ

!?!?!?

今度は問題しかねえよおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!

音無君の右隣りとか、それマア!?

ふつざけんなよそんなの俺耐えられないにきまつてるやないかそれに俺の視界には
かなでちやんもいるんやぞこの二人を試験中意識できる範囲に捉え続けなあかんとか
それ何て無理ゲーしかもこのせきにおつたままやつたら音無君がかなでちやんを「問題
ない大丈夫だ万事OKだ」つてシーンをもろに見なきやいけないだろうが見たいのでこ
こにいますごめんなさい!!

「まさか……俺は今日死ぬのか…? 萌え殺される…??」

隣りの音無君に気づかれぬようにそつと目線を向いていれば、彼は前から配られてい

たテスト用紙を後ろへと配つていた。

あ、この距離死ぬわ俺



「耐えた…!!　俺は耐えたぞお!!　我が生涯に一片の悔いな……かつたら成仏しちやう
からやめておこう」

テスト期間を乗り切った俺は、寮の自室に戻つて早々にベッドへ飛び乗ると、そのま
ま拳を天高く突き上げた。

天井にぶつけて少し痛い。

「耐えた！俺！偉い！よく耐えた俺!! 特に初日の音無君とかなでちゃん!! 一瞬俺の体消えかけてなかつた!? あれでああだと、最後とか爆発四散しそうなんじやが!? じやが!?」

ヒイイイイハアアアアアアアア!!! と一人で騒いでいる、同居人であるN P Cも部屋へと戻ってきた。

狂喜乱舞する俺を見てめちゃくちゃ引いていた。何でや。当たり前か。

律儀に最終日のテストの答え合わせを行つている同居人を見て、多少の落ち着きといふものを思い出した俺は、いそいそと自分のベッドの上で胡坐をかいた。

しかし、原作にない部分まで生で見れたことは一つアンとしてとても有意義な時間でもあつた。顔がにやけないように注意していなければ、今頃俺の顔はチンパンジーのようにくしゃくしゃになつたまま元に戻らなかつただろう。

思い出すだけで頬が緩むのを慌てて正し、思考を巡らせる。

さて、ここからだ。

「ここから物語は大きく動き出す」

戦線が実行した、かなでちゃんを最下位に落とすという作戦。答案回収中の入れ替えは毎回見ていたため、作戦そのものはうまくいっているだろう。

仲村自身、かなでちゃんが本当に神の使いではなくて人間なのかという疑問を解消する目的もあつたのかも知れないが。

そして、かなでちゃんが生徒会長をやめることによつて、副会長である直井が生徒会長代理となつて動き出す。

まさしく、このテストは物語の中盤におけるターニングポイントと言えるだろう。

「もうすぐだ……もうすぐ、彼らのイチャイチャが……グヘヘヘヘヘ……やべつ、想像したら涎が……」

言わずもがなだが、同居人には蔑むような目で見られた。



後日、生徒会長であるかなでちやんが生徒会長をやめ、代わりに副会長である直井が代理となることが全校集会で発表された。

Family Affair 上

直井が生徒会長をやめたかなでちゃんと代わって生徒会長代理となつたことが告げられた。

まさに、戦線の思惑通りに事が進んだといつてもいいだろう。しかし、彼らはそのかなでちゃんと存在が彼に対する抑止力になつていることを知らない。数日もしないうちに、彼らは直井の手によつて追い詰められることになるだろう。

それは原作ファンである俺にとつてもいろいろと言いたくなるシーンなのだが、そこを解決するのが我らが主人公である音無君だ。

この話によつて、あの直井が犬の様に音無君に懐くのだが……まあ、それに関しては特にいうことは無い。

原作の中でも割とショッキングな場面が出てくる話ではあつたが、それと同時に音無君とかなでちゃんとより深く関わることになる話もある。今回の俺は、その様子を密かに観察することがメインとなる。

椎名さえ居なければ、二人の様子を見ていたとしても誰にも見つかることは無いだろう。

今後の二人の事を思い浮かべるだけで頬が緩んでしまいそうになるが、この集会は戦線もみているのだ。変に目をつけられても困るため、何とか抑えて直立不動を維持する。

戦線は今夜にでもオペレーショントルネードを決行するだろう。

そうなれば、時間外活動の校則違反によつて戦線全員が反省室に送られ、彼らは反省室内で一夜を明かすことになる。

音無君とかなでちゃんの二人のペアが一番好きなのは変わりないが、戦線メンバーによる混沌とした様子も好きなので、中の様子を見てみたいとも思つてゐる。

「……旧校舎、だつたか？」

集会が終わり、クラスごとに教室へと移動していく中で、俺のその言葉は周りの喧騒

の中に消えていく。

普段は元校長室である作戦本部でしか見れない様子が、それ以外の場所で見られる貴重な場だ。見てみたいという気持ちが湧くのも仕方のないことと言える。気配を消して、窓の外からでもその様子を見られればそれでいい。

高松は、やはり筋トレでもするのだろうか。



けど、こんなことは予想してなかつたんだよおおお!!!

どうもこんばんは。普段はひとつそりとN P Cとしてふるまう山野です。
私は今、反省室にいます。窓の外ではないです。中です。

「男女一緒だなんて、デリカシーもなんもなしね」

「天使を失墜させれば、私たちの楽園となるんじやなかつたんですか、この世界は「……なんで上脱いでるの？」

「いつもはトレーニングの時間だからです」

反省室の隅っこ。

気配遮断を使用して戦線の様子を観察する。

まあ、こうなつてしまつたことに関しては、仕方ないと諦めるほかないだろう。俺の管理が杜撰だつたのだ。今は彼らの様子を生で見れるのだから、これはこれでよかつたと考えておくことにしよう。

はあ、と小さくため息を吐こうとしたが、椎名がいたので我慢する。他にバレなくても、あいつには気づかれる可能性があるからだ。

また、寝ている間に気配遮断が解けてしまう可能性もあるため、眠ることもできないだろう。

この世界に来て、徹夜しなければならないとは…

反省室内で戦線同士の話し合いが続けられ、高松の筋トレの呼吸音が続く中、俺は今日寮での出来事を思い返していた。



どうやら今日はガルデモのライブがあるらしい。ということはやはり予想通り、今日がオペレーショントルネードの決行日。

ボーカルを務めていた岩沢の穴を埋める要因としてユイが抜擢された初めてのライブ。確かに、岩沢が作つた曲にユイが歌詞を入れたんだつけかも？

まあいい。

大事なのは、もうすぐ音無君とかなでちゃんの関係性が深まるというただその一点のみ。

とりあえずは、今日の夜にでも旧校舎の方にこつそり行つてみることにしよう、と授業が終わると同時に帰宅した俺は、すでに靴があることから珍しく同居人が早く帰つて

きたんだなと考えた。

俺に苦手意識のあるらしい彼は、勤勉な生徒の如く夜遅くまで図書室で勉強してから帰つてくる。こちらとしても特に困つたこともなく、むしろ気楽でありがたいのだが、何か帰宅しなければならない用事でもあつたのだろうか。

「珍しいな。こんなに早……」

「やあ。君が山野君だね」

この寮の部屋は、基本的には二人でワンルームを使用する事になつていて。そのため、玄関の扉を開けたすぐその先に生活スペースが広がつており、その奥にある勉強机は玄関からでも丸見えだ。

だが、俺の視線の先には眞面目君な同居人であるN P Cがおらず、代わりに返答したのはその手前から。普段はN P Cが利用している一段目のベッドに腰かけていた室内でも帽子を外さない非常識な男子生徒だつた。

「……生徒会長代理が、どうしてここに？」

元生徒会副会長、現生徒会長代理。直井文人。

まさかまさかの存在の登場に一瞬目を見開いたが、すぐに表情を正してN P Cを装つ

た返答を返す。

しかし、直井は「タレコミがあつたんだ」と薄く笑つた。

「自分の部屋の同居人が、物騒な刀を所持しているから何とかしてくれ』つてね。脅されている、とも言つてたよ。まつたく、学園内にこんなものを持ち込まないでほしいものだ」

そう言つて、直井は手元に置いてあつた愛刀の物干し竿を手にする。その時に、小さく「長いな」と声を漏らしたのが聞こえた。

しかし……なるほど。同居人が密告したのか。

あれだけ言わないように戸口に言い聞かせていたんだが……こりや、やられたものだ。

「山野直樹。君は奴等とは違い、授業もちゃんと出ていれば、普段の生活もいたつて普通だ。生徒会としても特に注意することは無いと思つていたんだが……こんな危険なものを持しているとなれば話は別だ」

ベッドに刀を置いて立ち上がった直井は、窓を背後にして俺に向き直る。

「へえ、それはそれは……いつたい生徒会長代理様は俺をどうするつもりなんですかねえ」

密かに気配遮断を発動させる準備を整える。

しかし、いつたい何故こんなところまで直接やつてきたんだ？　いくらNPCのタレコミがあつたからって、こんなところまで言いに来るものなのかね。

わからない。だからこそ怖い。

原作にない、俺の知らない完全な未知。

「ハハツ、そんなに警戒しないでくれ。僕は取引に来たんだ」

そう言つてのける直井は、敵意がないことを示すためなのか軽く両手を上げて見せた。

「取引……？」

「そう、取引だ。同じ生きていた時の記憶を持つ者同士、仲良くしようじやないか」

「……は？」

突然の言葉に、俺は思わず声に出してしまった。

そもそもその話、この直井という男は原作においても今の俺と同じようにN P Cのような行動を続けていたのだ。数十年間戦い続けてきた戦線の誰もが気づかないレベルで、だ。その徹底ぶりは伊達ではないと言えるだろう。

そんな奴が、初見の俺に人間であることをカミングアウトしただと？ 何があると疑うしかない。

しかしそんなことが言えるのも、俺が原作を知っているからだ。直井からすれば、俺がすでに直井自身が人間であることを知っているとは夢にも思っていないだろう。

案の定彼は、「そう、僕もねあるんだ。生前の記憶が……ね」などと言つて笑う。

「君が知っているかどうかはわからないが、この世界には死んでここに辿り着いた人間と元々ここにいる人間の二つに分かれる」

何をもつて俺が生きていたころの記憶がある人間だと断定しているか……いや、そもそもあんな刀持っているN P Cなんてのがいないか。見つかった時点でバレてるわな。「それがどうして、仲良くしようという話になる」

「ほお……とぼけるのをやめたか。なら、話は早い。君には、僕の下に付いてもらいたい

んだ。あいつらと違つて君はどこにも属さない、所謂フリーの人間だ。そういうのは貴重でね。是非とも、手駒にしておきたいと思つたのさ」

……なるほど、要は勧誘か。自身と同じ、生きていた人間の駒が欲しいと。

確かにこいつの仲間である生徒会の構成員は、その全てがNPCだつたはずだ。彼が行動を起こすときは、基本的にその構成員に催眠術をかけて動かしているのだろう。いちいち催眠術など使わざとも動かせる駒が必要なのか。

「メリットは？」

「おや、乗つてくれるのかい？ フフツ、そうだね。僕の権限で君の行動の自由を約束しようじやないか」

「……ほお」

つまり、校則違反をしても見逃す、ということだろうか。

確かにそれはメリットと言える。其のが許されるのであれば、俺は校則違反などを気にすることなく音無君とかなでちやんの二人を見続けられるだろう。

「それに、だ。この世界の神であるこの僕の仲間になれるんだ。断る理由なんてなー」

「だが断る」

氣分良さげに話している直井の言葉を遮つて、キメ顔で言い切つてやつた。
 まさか、こんなきれいに決まつてしまつとは思つてもいなかつたが、決まると何故か
 気分がスカツとする。きっと今の俺の顔は劇画タツチだろう。

「……理由を聞こうじゃないか」

「簡単だ。俺が気に入らん」

これは割と本当の話。

音無君に懐いた後の彼ならともかく、俺は今のは嫌いなのだ。
 当然だろう。なんせ、これから彼は音無君とかなでちやんのマー・ボーデートを邪魔す
 る害虫となるのだ。誰がそんな奴の下に付くもんか。

それに、お前代理になつてから数日で改心して音無君のイヌに成り下がるだろーが！
 実質メリットねえよ！

「……まあいい。断るならそれまでだ」

少し苛立たし気な直井は、入れつ、と強い口調で声を発した。直後、俺の背後の扉が開き、ぞろぞろとN P Cが乱入してくる。

生徒会の奴等だ。

「へえ……言うこと聞かなきや実力行使つてか？」

「それもいいが、僕もそこまで野蛮じやない。それに、元々はこの危険物の所持について、君を連行しに来たんだ」

俺がどこにも逃げられないようにするためなのか、N P C達が両サイドから寄ってくる。せめて女子生徒のN P Cにしてもらいたいものだ。

もちろん、逃げようと思えば簡単に逃げられる。がしかし、ここで俺が余計なことをしてこいつの行動を変えさせてしまつた場合、俺にとつても甚大な被害を被る可能性が出てくる。

そう。それすなわち、音無君とかなでちゃんの二人のマーボーデートの延期、並びに中止だ。

何がどうなつて結果が変わるかわからない。もしかしたらそんなことは無くて、むし

ろ俺への警戒を強めすぎてかなでちゃんの事が疎かになり、二人の時間が延びる可能性もあるかもしれない。

もつとも、かなでちゃんとが校則違反をしたのをこの男が見逃すとは思えないが。

要は、これ以上俺自身が原作を引っ搔き回すようなことを起こしたくないのである。そこ、今更とか言わない。わかってるから。

だが俺が目指すのは音無君とかなでちゃんによるENDだ。それを無事に迎えるためなら、ここで連行されることくらいどうつてことはない。

そう考へている間にも、NPCの何名かに腕を掴まれた。

大人しく捕まる俺を前に、直井はベッドに置きっぱなしにしていた刀を手に取った。

「この刀は生徒会が預からせてもらうよ」

思っていた以上に長かつたのか、少し動かしただけで鞘の先を床にぶつけてしまつた直井は少しばかり驚いて身を強張らせた。

そんな様子を見て、俺は後で取りに行きますよと心の中で返答したのだつた。



で、なんでここなんだよおおおお!?

回想終了。

まさか、戦線と同じ部屋だとは思わなかつたし、戦線が捕まるまでここに放置されるとも思つていなかつた。

扉が開いて、もう出れるのかと思つたら仲村ら戦線のメンバーが入室してくるとか、それなんてどつきりですかねえ!? 思わず気配遮断使つて隅つこの方に待機する羽目になつてしまつたではないか。

どうしよう……このまま朝まで待つか……? というか、俺はいつまでここにいればいいんだ。もう五時間以上はここにいるんですけど!?

あのチヨロ犬、そんなに根に持つか普通!! と心の中で生徒会長代理の直井に文句を零す。

……とりあえず、もしこのまま戦線が開放される朝まで一緒だというのなら、このま

ま起きておいた方が良いだろう。そして、彼らが出ていくタイミングで俺もこつそりと出ていく。これしかない。

戦線の様子を見てみれば、ちょうど彼らが寝る場所を決めているタイミングだつた。男女で人数が違うはずなのに線引きされた範囲は同じくらいとは、リーダー仲村はやはり悪魔のような人だ（高松談）

まあ、俺は戦線ではないので女子側にいますが。そもそも最初からここにいたし。それに人数が多いわ汗臭いは高松は余計に暑苦しいわの男側に何故好き好んで移動しなければならないのか。

幾分スペースに余裕のあるこの場所は実に過ごしやすいだろう。

やがて、次々に戦線の者たちが固い教室の床に寝転がると、彼らは眠りについていく。そして俺以外の全員が寝静まつたところで、俺は一度伸びをした。気配遮断で見られてはいないのだが、念には念をと思つて動いていなかつたのだ。流石に体が凝つている。

「さて、もうしばらく我慢しますか」

「そこにはいるのは誰なのかしら」

ふうつ、と気が抜けたため息をつき、小声で呟いた俺の声に反応する者がいた。凜とした、女の声だ。

……まだ、寝てなかつたのかよ。

なんと言うか、俺の行動ガバ多すぎない？ RTAのゲームだつたら、再走不可避なんじやが？

のそのそと体を起き上がらせた声の主である仲村は、部屋の隅にいた俺へと視線を向ける。

既に骸骨の仮面は装着済みであるため、顔バレの心配はないだろう。だが、今回は紙もペンもないため、声を出さないという選択肢がない。声でも変えるか？

「そう……あのが椎名さんの言つてた人なのね……」

「そうだ」

俺の骸骨の仮面を見てそう呟いた仲村。気づけば、いつの間に起き上がつていたのか椎名までいる。

能力をもらつた『だけ』の俺は、気配は断てても、気配を探ることはできないのだ。そもそも、戦闘だつて俺にとつては筋肉痛との戦いだ。

……仕方ない、腹を括ろう。

「椎名とは会つてゐるが、君とは初めましてだな。死んだ世界戦線リーダー、仲村ゆり。俺は……そうだな、山野とだけ名乗つておこう」

Family Affair 中

「椎名とは会っているが、君とは初めましてだな。死んだ世界戦線リーダー、仲村ゆり。俺は……そうだな、山野とだけ名乗つておこう」

そう言つた俺の言葉に仲村はふーん、と興味深そうに視線を巡らせる。

何を考えているのかはわからないが、他の団員を起こして取り囲むようなことはなさそうなためひとまず安心してもいいだろう。流石にそれをされると、武器もない今抵抗は難しいだろう。

仮面をつけているためこちらの表情はわかりにくいだろうが、できるだけ余裕を持つているように見せることを心がける。

何しろ相手は何十年にもわたつてこの世界で戦線のリーダーを張つてきたあの仲村だ。下手を打てば何をされるかわからない。そもそも、戦線相手に敵対したこともないためなんてことは無いだろうが、それでもある程度警戒はるべきだろう。

「それで？ あなたはどうしてここにいるわけ？」

一通りの観察が終わったのか、仲村はこちらを見据えて質問を投げかけてきた。

「どうして、か。そもそも、ここには俺の方が先にいたんだ。仕方ないだろう」「そう。けど、それが隠れていた理由にはならないわ。何かやましいことでもあったわけ?」

うつ、という声が漏れそうになるのを何とか抑え込む。

「……別に。一人でいたところにいきなり大人数が入ってきたんだ。驚いて隠れただけだ」

「それで今まで私たちの一部始終を見ていたと。椎名さん、彼って覗き魔の類かしら?」挑発ともとれる発言。思わず、そんなわけあるか! と言いそうになつたが、これも仲村の作戦なのかと思考が働き冷静になれた。

B e c o o l 落ち着け、俺。

「……否定はしない。現に、今まで彼が私たちの作戦を影で見ていたことは確認している」

「えつ、何本当にこいつ覗き魔だつたの?」

「んなわけあるかつ」

思わず言つてしまつてからはつとした。

ものすごいさらつと覗き魔判定をくらいそだつたため、否定してしまつた。いやで

も、あの流れを止めなかつたら、これから先ずっと覗き魔扱いされかねない。

「何だ、ちゃんと言い返せるんじやない。うちはボケが多いから、ツツコミができる団員は大歓迎よ♪」

こんな状況でも雑魚寝している団員達を一見した彼女は、両手を合わせて何かをお願いするようなポーズでニッコリと笑っていた。

悪魔の笑みである。

「悪いが、今お前たちの仲間になるつもりは毛頭ない」

「……ふーん、今は、ね」

「そういえば以前、目的があると言つてたな。まだそれは達されてないのか？」

椎名の問いかけに頷いて答えると、彼女はそうか、と黙ってしまった。

「ちなみに、その目的を話す気はあるのかしら？　もしかしたら、私たちが何か手伝えるかも知れないわよ？」

「無理だな。少なくとも、今のお前たちではな。それに話すつもりもない」

仲村の言葉を即答で否定する。

そもそも、俺の目的は音無君とかなでちゃんとてえてえイチャイチャが見たいという
ものだ。
神への反抗！ 手先の天使は排除すべし！ みたいな風潮の今の戦線では達成でき
ない目的である。もつとも、その目的はこの事件をきっかけに前進することになるのだ
が。

そして、単純にそんな目的を話すわけがない。というか話せない。

「そ、ならいいわ。今は無理に誘わないであげる」
「いいのか？」

「ええ。敵にならないならそれでいいわ。正直、諜報とか潜入ができる人材は欲しいと
ころだけど」

やけにあつさりと身を引いてくれた仲村に少しばかり呆気にとられるが、特にこちら

に問題はないため何も言わないでおく。

そういえば、この直井の事件に片が付けば次はハーモニクスの分身体に関する事件だつたはずだ。

その時には音無君とかなでちゃんのため、俺も協力することはやぶさかではない。

というかむつちやする。

「悪いな。だが、目的が果たされたら協力することも考えておこう」

「入団はしてくれないの？」

「お前たち次第、とだけ言つておこう」

ではな、とだけ言い残して姿を消した俺は、そのまま教室を去ろうと扉の前まで……
そういうや、朝までここから出られないんだつた

「……そういえば、あの山野つて名乗つた彼、何でここにいたのかしら？」

「さあな。だが、気配はもうない。どうやつたかは分からないが、ここから出て行つたの
かも知れない」

特に音無君とかなでちゃんがいないため、十全に気配遮断は働いているようで、椎名も俺が未だ空き教室内にいることには気が付いていないらしい。
あんな消え方してまだいますみたいなのは流石に恥ずかしかったため、俺は最初と同じ教室の隅で静かに朝になるまで待つたのだつた。



とりあえず、音無君とかなでちゃんによる食堂デート（マークを食べよう）（異論は認めない）のイベントが起きるまでは寮には帰らず山籠もりでもしておこうと考えている。

というか、している真っ最中である。

直井は裏では暴力などを振るつている問題児であるが、表では眞面目面な彼が見回りなどで外へ出ているときに生徒会室へ潜入すれば愛刀である物干し竿は簡単に奪取できた。

このまま寮へ持ち帰つても、またあの日と同じ繰り返しになつてしまふので必要な物だけ持つて山へと駆けこんだのだ。

食事は食堂を利用すればいいし、風呂は誰も使わない時間を狙つて大浴場を使用する。それ山籠もり？ とか言わない。俺も分かつてゐるから。

万が一見つかつても、俺の気配遮断があれば容易に逃走できるはずだ。故に暫くはこれで生活することにしたのだ。

しかし、山籠もりとなると授業に出ることができないため俺の存在が戦線にバレる可能性が大なのだが、下手に授業に出て直井が教室まで來ても同じことだし、何よりこの件が終われば戦線、というか音無君の犬に成り下がる彼によつて俺の事が暴露されるとを考えればもう真面目に授業を受ける必要もないだろう。

受けてても良いことないしな。

というわけで、最近の俺は寝食と風呂以外の時間は基本的にかなでちゃんと監視……見守つてゐる。うん、見守つてゐる。

何やつてんのお前とか、ストーカーかよ（笑）とか、客観的に自分の行動見てキモイなとかいろいろあるが、これも仕方ないと割り切つてゐる。音無君との絡みを見逃すことに比べれば屁でもないわ。

別に音無君が対象でもよかつたのだが、戦線に所属する彼はいつどこにいるのかわからないのだ。なら、いつも学校にいて眞面目に学生をしているかなでちゃんを見ていた方が良い。

というわけで教室まで来てみたんだが…

「くっそ！　またひさ子の一人勝ちかよお!!」

なんか、教室の後ろで麻雀しているひさ子、藤巻、TK、松下五段の四人組

「先生！　トイレ！」

「またお前か！」

およそ一分ごとにトイレに行くユイ

「……」

無言で天井に張り付く椎名

それに、堂々と一般生徒の机の上に寝転んで居眠りする野田に、お菓子を食べてる大山。喋る日向と音無君。

何このカオス

まあ、教室の外、窓を通して見ている俺が言うのもなんだが。

「あー……そりゃ、直井の様子を見るつてことで不真面目な行動をしてるんだっけか……」

若干朧気になつてゐる記憶を掘り返してみれば、そんなこと也有つた気がする。しかし行動が早いな。今日の朝開放されたところのはずだが……

どうやら、覚悟を決めた山籠もりはやらずに済むかもしれない。いや、松下五段とかからすればそんなもの山籠もりではない! と断言されそうなものではあつたが。

「……待てよ? てことは、食堂デートつてこのあと……?」

視ないといけない（使命感）

F a m i l y A f f a i r 下

さて諸君。ここで選ばなければならぬ選択肢を用意した。

選べ（ジョージ風）

1. 原作通り、音無君とかなでちゃんの二人のデートを見届ける
2. 直井たちが食堂に立ち入るのを妨害し、音無君となかでちゃんの時間を伸ばしてあげる

何その究極の二択

前者を選べば、原作通り。しかし、後者を選べば、俺が二人を見れない変わりに彼ら彼女らのイチャイチャできる時間が増えるという。

もう一度言う。

何その二択。

しかし、迷っていたところで時間は待ってくれないのだ。こうしているうちに、野田を引きづり、日向と共に教室から逃亡した音無君がかなでちゃんを見つけて麻婆豆腐を食べに行くまでのタイムリミットが刻々と近づいているのだ。

「ノオオオオオオオオオオ!! いつたい、どうすればいいんだあああああ!!」

学校の屋上、誰もいないことを確認して喚き叫ぶ。

音無君とかなでちゃんのため、ここは二人のためにも俺が骨を折って素晴らしい時間を提供してあげたい……!!

しかし！ しかしだ！ そんな俺の心の中に、「フフ……へただなあ、山野くん。へたつぴさ……！ 欲望の解放のさせ方がへた…」などと言つてくる変なおつさんがいるのだ……!!

二人を見たい。だが、二人の時間をもつと増やしてあげたい。

こんな時に、妄想幻像ザバーニーヤが使えればどれほどよかつただろうか。分体に妨害を任せて、俺自らは二人の観察……いや、誰が妨害に回るかでもめそุดな。

時間がない中でうんうんと唸る俺。しかし、そんな時に俺の耳がこの屋上へ向かつて階段を上つてくる音を捉えた。

誰だこんな時に、と見つからないように貯水タンクの影に隠れて気配遮断を使用する。

すると現れたのは、今回の事件の首謀者である直井その人だった。その傍らにはNPCらしき一般生徒を連れ立っている。

一瞬、何をしに来たのかと思ったが、その疑問は直井が一般生徒のNPCに蹴りを入れたことですぐに解消された。

「……あー、そういうや、そんなことしてんなんだつけな」

影で暴力を働く生徒会長代理。

真面目に学園生活を送れば消滅してしまうこの世界において、表では真面目な生徒を演じている直井はああやつてその存在を保ち続けてきたのだ。

そのやり方は、まさにSSS団とは真逆と言つてもいいだろう。

まあしかし、そのやり口がここまで戦線の誰一人にもバレずにNPCを演じ続けてきたことに関しては称賛を送ろうではないか。

もつとも、それもたつた今、バレてしまうんだがね。

視線を眼下、屋上へ繋がる唯一の扉へとむけてみれば、ほんの少しだけ開かれていた。見ていてあろう彼女、仲村が去った事を確認した俺はそれに続き、気配遮断を維持

したまま同じく扉を通つて屋上から去つたのだつた。

いや、だから選択肢



仮に、俺が一般生徒などを誘導して、学園内のあちこちで校則違反をさせたとしても、直井はかなでちゃんを優先して動くことだろう。

何せ、かなでちゃんがいたからこそ彼はこの数十年間N P Cに擬態してきたのだ。そのかなでちゃんが生徒会長を解任され、更には校則違反。直井にとつてはまさに逃すことのできない絶好の機会である。

そう考へると、原作でも彼がかなでちゃんと音無君の行動に対しいち早く対応できたのは監視でも置いていたことが考えられる。まあ、彼にとつての一番の障害がかなでちゃんなのだ。

直井だつて必死だ。それくらいはするだろう。

しかし、常に監視とか、考えてみればものすごいストーカー行為である。何て奴だ
 (チーメラン)

で、だ。

もし仮にその監視役とやらが存在するのであれば、その監視による直井への報告を遅らせる、もしくは阻止するだけでも二人のデートの時間は長引くはずだ。
 うまくいけば、俺はすぐ目の前であーんとか見れちゃうかもしない。

何それ尊くて死にそうなんじやが？

やらねば

教室内で自主的に勉強を進めているかなでちゃんと観察しながら、決意を固めている
 と、その様子を見かけたのか音無君がかなでちゃんとの方へと歩みを進め、ついには話し
 かけていた。

え、二人が話しているだけで絵になるんじやが？ カメラありません？

……え？ ないの？ なんだよクソ野郎!! せつかくの光景が額縁に飾れねえ
 じやないか!!

写真部先に行つてカメラパクつてくれればよかつた！ あるか知らんけど！ あるで

しょ!?

「……つと、いかんいかん」

ここで取り乱しては、計画がおじやんになる可能性もある。

そう思いなおして、視線を音無君とかなでちゃんの周囲へと巡らせる。すると、二人の様子を遠巻きながらも注意深く見ている生徒を発見。他にもいるかを探してみたが、それらしき生徒は今見つけた彼だけのようだつた。

戦線の遊佐が通信手として活動していることは知つてゐる。そして、そういう機械がこの世界に存在してることも知つてゐる。あれ、作ったのか元々あつたのかはわからぬけどね。

ただ、あの生徒会の一員と思われる生徒が通信機などを使つていないので報告そのものは生徒会室へ直接行つて行われるのだろう。

「つまるところ、それを防ぎさえすれば問題はない、と考えたわけだが……いやはや、ここまで俺の予想が当たると怖くなるな」「ンー!! ソン!!」

生徒会室へと直行しそうになつていた彼を呼び止めた俺は、無駄に高い能力を惜しみなく発揮して彼を縛り上げると、校舎裏の人気のない場所へと転がしておいたのだつた。

「すまない。いきなり簾巻きにして本当にすまないと思つている」

だが、これもすべては俺の……もとい、音無君とかなでちゃんの為!! あの二人のためであれば、どんなことも正当化できる自信がある!!

「というわけで、誰かに見つけてもらえるよう祈つておくよ。もちろん、事が済んでまだそのままなら、俺が助けに來るので安心してくれ。では!」

「ンー!! ヌンー!!」

安心できるか!? みたいなことを叫ばれた気がしないでもないが、それを無視して先を行く。

途中生徒会室を窓の外から見てみたが、直井は何かの書類に目を通してゐるだけで問題はなさそうだ。



あああああああ!!!! 尊い!! 尊いよおおおおおお!!!!

視線の先で起きている光景に、俺は思わず目を閉じそうになるが、今この時だけは、例え焼かれようとも目を閉じるような愚かなことはしないだろう。
音無君と!! かなでちやんが!! 麻婆豆腐食べる!!
文字にすればそれだけ。しかし、目の前にすれば話は別。

今俺は、間違なく、人生の絶頂にいる!!!

え、これより上があるとかマジですか？ マジです。なら死んでしまいます。

二人から少しばかり離れた席で顔面を両手で押さえながら転げまわりたくなる衝動を必死で抑え込む。

ほら見てよ!! たつた今かなでちやんが麻婆豆腐の前にして「ナイススマルだわ……」と普段はあまり変化のない表情がご機嫌だとわかるくらいに緩んでいるかなでちやんに対して、苦笑いを浮かべている音無君というこの構図！

正直な話、一ファンとしてあの麻婆豆腐に挑戦してみたことはあつたが、そもそもの話辛いのが大がつくほど苦手な俺には無理な話だつたが、それでも食わねばと食べ切つたことがある。

あの時は、この世界で初めての死を覚悟したものだ。

「うまいわ」と黙々と食べ勧めるかなでちゃん。そんなかなでちゃんは音無君の指摘によつてはじめて自分が麻婆豆腐が好きなことを自覚し、レンゲですくつた豆腐をしげしげと見ていた。

そんな二人を少し遠めで観察する。

おお、神よ。俺はこの世界に来れて良かつたと思つています……!!

感謝を！

危うく成仏されないように気を引き締めて尊みを感じながら、まるで小動物の様に麻婆豆腐を平らげていくかなでちゃんを観察する。

ところで、音無君はあるの麻婆豆腐をちゃんと完食できるのだろうか。

しかし、俺の心配は余所に音無君も少しずつではあつたが麻婆豆腐に手を出し始めた。確かに辛いが、後味などは良いとのこと。俺には分からなかつたが。

一口食べては喰つている音無君ではあつたが、そんな彼の様子を見るかなでちゃんの表情は綻んでいるようにも見えた。自分の好物を食べてもらえることが嬉しいのだろう

う。

ある程度食べ勧めた音無君に自ら「どう?」と聞くかなでちゃんにも悶絶ものであるが、その間に「ああ、確かに辛いが、結構いけるもんだな」という回答に非常にご満悦な様子のかなでちゃんには俺という異端を滅するだけの効果がありそうだつた。失礼、若干逝きかけた。消滅的な意味で。

こんな光景が見れたのも、俺自らが動いて原作に手を加えたことが原因なのだろう。甚だしい原作乖離は流石に勘弁ではあるが、この程度でしかも特しかないものであれば積極的に関わることも吝かではない。むしろどんとこい。

そして、そんな二人の食堂デート、麻婆豆腐もあるようが終盤に差し当たつたときだつた。

「こんな時間に何をしている」

ナニですが何か?

直井とその他大勢の生徒会メンバーの登場によつて、至福の時間が唐突に終わりを告げられた。

まあ、原作だともつと早く来てたことを考えれば、よくもつたほうだろう。

本当ならば、ここで直井の強行を止めたいたところではある。しかし、あの牢獄でのイベントがあつたからこそ、音無君がかなでちやんを取り巻く現状に対してもう所ができるのだ。

故に、ここから俺は何もしない。何もできない。

だからこそ祈ろう。

あの原作の様に、無事に牢獄から出てくれと。そして直井を止めてやつてくれと。

全部知っている。だが、あえて何もしない俺がそんなことを言う資格はないのかもしれない。だって、俺は音無君とかなでちやんが大事だと言いながらも、その音無君が大ことに思つてゐる戦線メンバーの被害を無視してゐるのだから。

だが敢えて言おう。

俺はAngel Beats!という物語が大好きだ。
そして何より、音無君主人公ヒロイチとかなでちやんが大好きだ。

二人が連行されていくその姿を見ながら、俺は一人食堂を去つたのだつた。



さて、ここからは後日譚とでもいおうか。

無事に牢獄から脱出した音無君とかなでちやんは直井をとめて事件を終わらせた。
その際に、直井が異常なほど音無君を尊敬するようになつたことは言うまでもないことだろう。まあつまりは、原作通りなのだ。

さてさて、そうなると続いてはモンスターストリームからの、かなでちゃんの分身事件か？

音無君がかなでちゃんを誘つて、戦線メンバーとともに魚釣りへ。その後、釣り上げた主を全校生徒にふるまう際に名前呼びするようになるシーン。非常にみものである。

あと、これは後で知った事であるが、直井の奴俺の事を戦線に言つていないようだつた。

何のつもりかは知らないが、それならそれでこちらも動くことにした。具体的には、寮生活することにした。

ただし、ルームメイト。貴様は許さん。

ということで、念願の一人部屋獲得である。

人目や他人を気にしなくても済むというのはこれほどまでに素晴らしいものだつたのか、と感動を覚えそうになる。

今回全く出番のなかつた物干し竿を手入れを終えた俺は、そのままごろんとベッドに横になつた。

とりあえず、川釣りは様子を見に行くことにするか。

A l i v e

そう言えば、川の主を釣りに行く前に音無君の過去回想があるんだつけか。

戦線メンバーがいつ川へ向かうのかと心待ちにしていたのだが、一向にその様子を見せないことに疑問を抱いていた俺であつたが、ふとここでそんなことを思い出したのだった。

音無君の過去。

物語後半で彼自身は自身の生前に意味を見出すのだが、この時点では「何も成し遂げずに死んだ」と考えていたはずだ。

あの話を聞いたときには、俺も思わずその過去に同情したものだが、現実目の前に存在している彼にその感情を向けることは間違っているだろう。

ともあれ、直井の催眠術によつて生きていた過去を思い出す話だ。あんな過去があることがわかれれば、俺自身もう諦めてしまうかもしけないが、そこは我らが主人公音無君。ちゃんと戦線に復帰してくれるため心配はしてないし、言つた通り、後半でちやんと意味を見出して前を向いてくれる。

そのきつかけを作るのがかなでちやんと言うのも俺的にはなかなかの胸あつ展開だ。

「しかし……過去、ねえ」

俺の過去つてどんなだつけか……？

特に山も谷もない一般的な日常を送っていた男子高校生が事故で死んで、空想の存在だと思っていた神と名乗る奴の手で転生。

『時に理不尽でも尊いもの、それが人生』

この『Angel Beats!』のテーマでもあつたこの言葉。

俺はこの世界にいる人間の様に、何か理不尽な目に会つて、それに納得ができずにこの世界へとやつてきたわけではない。

いうなれば、ただ俺の好きなキャラクターが生きて動いて、そしてイチャイチャしているところを生で見たかつた、なんて不純な動機でやつてきたのだ。

それが望みだつたのだから仕方ないだろう、と考えればそれまでなんだが、この世界に来て彼らを見ていると、少しだけ自分の境遇に罪悪感が芽生えることもある。

「……やめだ。変に考えたら暗くなっちゃう」

ぶんぶんと頭を振り、思考を停止させる。

こんなこと考えてたら楽しめるものも楽しめなくなつてしまふではないか。それで

こそ、この世界へときた意味がないというものの。

時が来るその時まで、俺は純粹な心で草むしりしているかなでちゃんを見ておこうではないか。

はあああああ!! 麦わら帽子のかなでちゃん可愛いよおお!! 早く音無君とコラボして! 写真に残すから!! (写真部から強奪)

かなでちゃんが草むしりをしている様子を遠目で眺めながら待つていると、やつと待ち望んだ集団が姿を現した。
死んだ世界戦線
SSS団のメンバーたちだ

彼らは草むしりをしているかなでちゃんには気づいていないようで、花壇を横切つてそのまま医療棟の方へと向かつて行く。

しかし、その手段の中で一人だけ、草むしりをしているかなでちゃんに気付く者がいた。

我等が音無君その人である。

彼は手段から一人抜けると、そのままの足でかなでちゃんの方へと寄つていった。

いざ参る。

「お前、こんなところで何してんだ？」

二人の声が聞き取れる位置まで近づき、全力で気配遮断を使用する。音無君の問いかけに、かなでちゃんは立ち上がる。その手を開くと、中から蝶が空へと飛び立っていく。

そんな様子を二人して眺めているその瞬間をカメラでパシャリ。
いやあ！ 二人が綺麗に収まるいいアングルですなあ！

除草などをしているというかなでちゃんの言葉に、少し驚いている様子の音無君。しかし、生徒会長ではなくなつた彼女は、今現在ほとんどやることがないのだ。
ほら、（魚釣りに）誘え誘え！

思いついたかのように、魚釣りへとかなでちゃんを誘う音無君。

連射機能と気配遮断を惜しみなく使用し、気付けば俺は花壇で一人、涙を流して気絶していたようだ。

時間にして数秒程なのだろう。向こうの方には手を引かれるかなでちゃんと、先導して走る音無君の後姿。

俺はその二人の後姿が見えなくなるまで、何度も心の中で感謝を述べた。いいもの、見させていただきました：!!

落ちていた麦わら帽子を拾い上げ、それがどこかへ飛んでいかないようにとビニールハウスの中においておく。

かなでちゃんとが除草に使用していたスプレーやスコップなどもまとめておいておけばいいだろう。

俺はカメラの中身を確認すれば、音無君がかなでちゃんと手を強引に取つて駆けだす瞬間が写っていた。麦わら帽子が飛んでいく瞬間と言うこともあつて最高にエモい。

「……おつと、速いところ川に行かないとだな」

音無君が無知なかなでちゃんと釣りを教えるところもみたいが、個人的にはそれ以外にも見どころのある話だつた。

緑川ボイスのフィッシュユース藤に、超巨大な川の主。特にフィッシュユース藤はここでしか見れないであろうレアキャラである。

一度見ておきたいと思うのはファンの心情よな。

引き続きカメラをぶら下げ、俺は医療棟近くの土手……ではなく、その川の向かい側に陣取つた。

気配遮断を使えば、向かい側とはいえこうしてやり取りが見えるのは本当にありがたい。

俺たちは消えないから、仲良くしていいという音無君のイケメン（知つてた）セリフは最高です。

その後も、音無君がかなでちゃんと釣りのやり方を教えたり、日向が連れたり、思いつきり川へ投げ入れろ、でタケヤマが空の彼方へと飛んで行つたり。

「クライストとおおおお!!」という彼の言葉は印象的だつた。

確か、オーバードライブ、だつけか？ かなでちゃんとあの怪力はAngelPlayerによるものだつたはずだ。

「……そりいえば」

AngelPlayerの事を思い出して、ふと考へる。

あれに関しては物語が終わつても謎が多くつたはずだ。話によれば、あれはこの世界を改変するためのプログラムであり、最終戦で出てくる影の原因ともいえる代物だ。

……個人的に調べてみるのは、ありかもしれないな。

構えていたカメラを降ろす。

視線の先では、ちょうど戦線のメンバー達がみんなで川の主を吊り上げようとしている。

そこにかなでちゃんが加わって……

「つ！ ……やつぱり、分裂したか」

空へと舞い上がった彼らを助けようとしたかなでちゃんは、ハンドソニックで超巨大な川の主を輪切りにしてしまう。

しかし、その際に彼女は攻撃的な赤い目のかなでちゃんと分裂しているのだ。

その様子を確認できた俺は、物語が正常に進んでいることに少しだけ安堵した。

心苦しいが、音無君とかなでちゃんの為だ。今回の話についても俺は見守ることにしようじゃないか。

輪切りにされた川の主は、戦線だけでは消費しきれないとこのあと学校でNPCを含めた全生徒におすそ分けされる。

個人的にあの主の味がどんなものなのか気になるし、その際に名前で呼び合うことになる音無君とかなでちゃんのやり取りも聞きたいので、一足先にもどつてNPC達にもぎれることにしよう。

「なら、善は急げだ。荷物は部屋においてすぐ——」

「すぐ、何？」

背筋に氷柱を突っ込まれたような、そんなイメージが湧きそうな冷徹な声。気づけば、俺は背負っていた愛刀である物干し竿に手をかけてその場から距離を取つていた。

「あら……？ 避けるなんて、悪い生徒ね」

「……おいおいおい、嘘だろ何でここにいるんだよ」

NPC用の制服の裾から伸びる銀の刃に、銀髪赤目の美少女。分身体であるかなでちやんが、俺の目の前に立つていた。

「ここは立ち入り禁止区域よ。校則違反はお仕置きね」

A l i v e ~ D a n c e r i n t h e D a r k

い。

面前でハンドソニックを構えるかなでちゃん（分身体）に、俺は冷や汗を流すしかな
り。

分身体とは言え、そのスペックはオリジナルであるかなでちゃんと同じものだ。
その性能は以前ギルド降下作戦で対峙した時に十分体験させてもらつたが、代償覚悟
で英靈スペックを引き出さなければ相手をするのは難しい。

そもそも、あの時とは条件が違うのだ。

明確にギルドという目的があつたかなでちゃんに、足止めする気しかなかつた俺。し
かし事今回に至つては、その対象は俺一人に限られる。

そして分身体であることもやつかいだ。

オリジナルのかなでちゃんが守りであるなら、分身体である彼女はその対極。好戦的
な性格であると言えるだろう。

動きに警戒しながら、物干し竿を引き抜く。

「あら？ 危険なものを持つているのね。それも校則違反よ」

「あいにく、もつと危険そうな相手が目の前にいるからな」

皮肉を口にするも、彼女は「そう」と短く零しただけだつた。
その反応に嫌な予感すら覚える。

以前対峙した時の事を考えれば、身体能力は若干俺が有利。だが、それは時間制限付
きで時間が来れば痛みと疲労で俺がまともに動けなくなる。

あとは得物の長さか。間合いに入られてしまえば、手数で有利な向こうに良いように
されるだろう。

となると、俺がとれる選択肢は間合いを取つて隙を伺いつつ、その時が来れば気配遮
断を全開にして即撤退、というもの。

あるいは、燕返しの一撃で殺して逃げるか、だ。

幸い、この世界では死んでも生き返るため、この後の物語の流れに影響は出ないはず。
しかし、だ。しかし……！

(俺に、分身体とは言えかなでちゃんと殺せるのか……!?)

いや、実際に俺が殺されるかもしれないというピンチなのはわかつてゐるし、何なら
現在進行形で襲い掛かってきそうな彼女を危険だと判断できないわけではない。
が、こんな時でさえ『推し』であるというその事実のみで行動に起こせない俺はもは

や末期なのではないだろうか。

……願いを叶えてやるつて言われてここに来た時点でもう末期か。ハハツ。

「ヌウツ!?」

「……」

無言で両刃を振るつてくる分身体を、体が耐えられる程度の動きでいなす。的確に急所を狙つてくる分、まだ攻撃の予測はつきやすい。それでも殺意マシマシなその攻撃には思わず顔をひきつらせた。

「シツ！」

詰められた間合いを離すため、物干し竿を横に薙ぐ。

分身体は屈んで刀を避けるが、それは予測済み。少々無理はするが、薙いでいた刀の軌道を修正し、袈裟斬りを繰り出した。

「つ」

しかし、彼女は両手を交差して頭上に構えると、その一撃を耐えた。

まことに想い、今度はバツクステップでこちらから距離を取るも、彼女は素早く追従し、ブレードによる刺突を繰り出した。

回避は……間に合わない。

「グツ……!?」

仕方ないと覚悟を決め、心臓を狙つたその一撃を左肩へとずらし、即死を免れる。想像を絶する痛みに悲鳴をあげそうになるが、そんな暇はないため彼女の胸に向けて蹴りを入れる。

無理やりな体勢で苦し紛れの攻撃は、当然の事ではあるが彼女には通用しない。軽く後ろに下がることで簡単に避けられる。

距離を離せただけマシと考えよう。

「危ないわね」

「俺が言いたい一言だよ……」

幸い刺突の攻撃であるため、少しでも時間が経てば左肩は治るはずだ。現に、治つていく気持ちの悪い感覚がある。

が、この状況で治るまでは待てないだろう。

左腕が満足に使えないため、物干し竿を十全に扱うのは少し難しい。使えないこともないが、目の前の存在を相手にするには致命的すぎる弱点だ。仕方ない、と俺は得物である物干し竿を背負った鞘に納刀する。

「抵抗をやめたのね」

「そんなつもりはない……ね!!」

可能な限り全力をもつて、俺は足元の土を蹴り上げた。

筋力のステータスが低いとはいえ、英靈スペックを十全に使用すればそれなりの砂埃は巻き起こすことができる。

突然の行動に反応ができなかつたのか、彼女は顔を防ぐように掲げただけで追撃はしてこない。

逃げるなら今だろう。

俺ができる限りの気配遮断を使用し、すぐさまその場から離脱する。

彼女の身体能力を侮つてはいけない。故に、後の筋肉痛を度外視して最速で寮の自室まで避難した。

「はあ…はあ…ぐつ…」

背負つていた愛刀を立てかけ、すぐさまベッドへとダイブ。

左肩はもうほとんど治つてはいるが、貫かれた時の痛みを思い返して思わず顔を歪めた。

外がやけに騒がしい。きっと、SSS団が川の主のおすそ分けでもしているのだろう

う。すぐにでもここから出て、音無君とかなでちゃんの名前呼びイベントをすぐ傍で目視したいが、血の付いた制服で行つても怪しまれるだけだ。

購買部で新しく購入しなければなるまい。

「くそ……ここにきて、イベントを見逃すことになろうとは……許すまじ分身体」

悔し涙で枕を濡らしながら、ぶつぶつと文句を零していく。

……まあいい。この悔しさは、今日写真に収めた音無君とかなでちゃんの姿を鑑賞することでの紛らわせることにしよう。

あれ一つで、ご飯三杯はいけるぜ！

「…………あれ？」

写真を見ようと、首から吊り下げていたカメラを取ろうと手を動かしたのだが、俺の手はただ虚空をつかみ取るだけだった。

その可能性を信じきれない俺は、恐る恐る視線を下げた。

綺麗にすっぱりと斬られた紐だけが残つていた。

「…………」

時間にして数秒、俺は受け入れたくない現実を前に言葉を失うしかなかつたのだが、

それに反して頭の中は大パニック。

暴走列車が街中を蹂躪していくように、様々な言葉が駆け巡つた。

!!!!!!
「分身体いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

結局、口にできた言葉はそれだけだった。



グランドで川の主のおすそ分けが行われているのを泣く泣く見過ぎしながら、俺は先ほど分身体と争った場所まで戻ってきた。

大きく地面がえぐられているため、場所はよくわかる。

もしかしたら、という可能性にかけてカメラが落ちていることを願つたのだが、いくら探しても目当てのものは見つからない。

これだけ探しても見つからないと言うことは、あの分身体が持つて行つてしまつたと考えた方が良いだろう。

「まざいまざいまざいまざいまざい……！」

一番考えたくなかつた可能性が浮上し、俺は思わず頭を抱えた。

何がやばいって、あの中には俺の盗撮記録がそのまま残つていると言う点だ。

ありがたい可能性としては彼女が拾つたカメラを何事もなかつたように写真部に戻すことだが、たぶんそんなことはしてくれないだろう。

何が写つているのか確認するだろう。

校則違反をお仕置きとか言つて襲つてくるような奴だ。下手すれば写真をされることが考えられる。

泣きたくなる。

だがこれはまだましな方で、もつと最悪なのは彼女が写真を消さず、カメラを手元に残しているパターンだ。

消されないからいいだろうつて？　甘いね！

この後のイベントは、そう。元ギルドの奥へと誘拐されたオリジナルのかなでちゃんをSSS団総出で救出する。

原作では、音無君がかなでちゃんの元へとたどり着き、他のメンバーたちと共に帰還するのだが、その際にカメラが見つかってみろ。

もう、考えただけで地獄よ。

恐ろしい未来の可能性に、頭を打ち付けたくなる。

そうなると、俺が考えられる最善は自らカメラの回収に動くことだ。
だが、一人で回収に向かうのはあまりにも危険だ。

何せ、たどり着くまでの間に、いつたい何人の分身体が待ち受けているのか。そんな
人数を連続して相手にするのは流石に無理だし、待ち受けているのは狭い一本道。十全
に物干し竿が扱えるとは限らないだろう。

なら相打ちになつたかなでちやんが誘拐される前に回収を、と思うかもしれないが、
原作において分身体が姿を現した後からかなでちやんのいる保健室を襲撃するまでの
間、分身体の行動は不明なのだ。

おまけに、うまく見つけたとしてもカメラが回収できるとは限らない。

なら、誘拐の後で SSS 団に付いて行くのがベストだろう。最悪、元ギルドになくて
も SSS 団に見つからなければそれでいい。後々捜索するだけだ。

「しつかし、こんなことで傍観をやめることになるとは……我ながら情けない……」夜空の下、俺の残念なその言葉は誰にも聞かれることなく虚空へと溶けていった。

◇

仕込みとその成果は完璧だと言つていいだろう。

二日後。

どうやら、原作通りにかなでちゃんと分身体は心臓を一突きの相打ちとなつたらしい。

それに伴い、SSS団も行動を開始。

彼らを更生させようとする分身体を警戒して、授業を受ける振りをしていた。

今頃、仲村がかなでちゃんの部屋でAngel Playerの書き換えを行つているだろう。

書き換えた内容はアブソープ。ハーモニクスによつてできた分身体を元に戻すスキルだ。

それを使用させなあいために、分身体は見張り役の松下五段とTKをものともせず、かなでちゃんを誘拐することになる。

「……始まつたか」

俺は音無君や日向と同じクラスであるためその動向がよくわかる。
遊佐が教室に現れて何かを二人に伝えると、彼らは急いだ様子で教室から飛び出して
いった。

それを確認した俺も教室を出る。

向かう先は SSS 団幹部が集まる保健室……ではなく、自室。

立てかけてあつた物干し竿を背負い、俺は部屋を後にする。

接触するなら、仲村たちが分身体の目撃情報を集め始める今だろう。

SSS 団のメンバーたちが N P C などにも接触して情報を集めている様子を尻目に
しながら、俺は目的の人物を探す。

そして夕方も近いころ、俺はその人物と接触を図った。

「あなたは……確か、山野？」

「久しぶりだな、仲村。早速で悪いが、協力を申し出たい」

その人物……SSS団リーダーの仲村は、突然現れた俺に少しだけ驚きながらも俺の名前を口にしたのだつた。

Dancer in the Dark

「集めた情報から、幽閉場所はギルドの可能性が高いわ」

場所は体育館。

その壇上に立つ仲村の言葉に、集まつた戦線のメンバー達はまたか、とざわついた。話によれば、かなでちやんがいると考えられるのはその最深部。要は前回のギルド降下作戦で向かつた場所と同じところだ。

「またギルドかよ……」

「前回のはほぼ壊滅状態だぜ？」

ため息を吐くように言う日向に大丈夫なのかと不安を口にする藤巻。しかし、そんな二人を見た野田は臆したのかと笑う。

いや、お前真っ先に脱落してたからな？　というのは満場一致で言つてやりたい言葉

……あ、日向が言つたわ。

こんな状況であるにも関わらず、戦線メンバーが騒がしいのは流石と言うかなんとい
うか。

おまけの様に着いて来ている俺からすると、頼もしいと思えばいいのか心配をすればいいのか判断に困るものだ。

まあ、彼らの事だ。原作通り、きつと成し遂げてくれるだろう。

今回は、その勝ち馬に乗れればそれでいい。

野田が、仲村の冷たい一言で沈んだ。

沈めた本人は、そんな彼の事をまるで気にする様子はなく、むしろ明るい笑顔で作戦の説明に移った。

「なあ、その前に一つ聞いてもいいか?」

「何かしら、音無君」

かなでちやん奪還作戦の説明に入る直前、一人拳手した音無君。

彼は仲村からの許可が出ると、徐に俺の方を指さして……

……え、俺?

「関係なさそうな……というか、見るからに怪しいのが紛れているけど……あいつは？」
「ああ、彼ね。そう言えば言つてなかつたわ」

推しに……!! 認識……!! されている……!! だと……!?

不思議そうにこちらを見ている音無君と目を合わせないよう、俺はそつと仮面越しの視線を横へと反らした。

音無君……見ているな……!!

体育館の端つこの壁に背を任せながら話を聞いていた俺。

現在の姿は新しく新調したN P C用の学ランを身に纏い、長刀物干し竿を背負つている。

なにより特徴的なのは、今回も演劇部より拝借してきたマスクだろう。

前回の球技大会で使用していたものが見つからなかつたため、今回は代わりにどこの部族だよお前、と言いたくなる派手なものを使用。

背中を覆う程の緑と黄いろの飾りが特徴的だ。

マスクがこれしかなかつたからしやーない。

「彼は今回の作戦における協力者よ。少なくとも、私たちと敵対することは無いから安心しなさい」

「いや怪しすぎるだろ!?」

思つたよりも少ない仲村の紹介に日向がツッコミを入れる。

しかし、一度は共闘した中なのだ。日向は覚えていないのだろうか。

「……ひょっとして、マスクか？ 球技大会の時、椎名が連れてきた……」

.....

『くあ wせ d r f t g yふじこーp』

「な、なんだこいつ!? 急に痙攣しながら倒れたぞ!」

「これは……遺言、でしようか?」

「……まあ、死んでないから大丈夫だろ」

いけない、あまりの嬉しさでこのまま昇天するところだつた……

まだ、俺には見ていない景色があるのだ。それまではこの世界から消えるわけにはいかん。

「あ、起きた」

こちらを覗き込むように見ていた大山に、軽く手を擧げることで問題ないという意思を伝える。

『改めて、今回の作戦に協力させてもらう、マスク・ザ・斎藤だ』

「こんな時にアホなことを言わないでくれないかしら、山野君」

アホはうちの奴らだけで十分なの、と深いため息を吐く仲村に俺は心の底から合掌をした。

「マスク、山野って名前だつたんだな……」

「如何にも。ついでに普通に喋れる」

「筆談だつた意味は!?」

おお!! これが日向のツツコミか!!

なるほど、この打てば響くような素晴らしいツッコミは癖になりそうな気もするぞ！
楽しくなつて暴走しないように自重しなければなるまい。

「改めて、山野だ。今回は俺の方から協力を申し出たため、名前と声については隠すことをやめている。まだ顔は出せないが、少なくとも俺がお前たちと敵対するつもりがないことは信用してもらいたい」

「何で協力を申し出たんだ？」

「……すまないが、詳しくは言えない。が、仲村にも説明はしたが、あるものを取りに、とだけは答えておこう」

本当なら、ここで顔まで出して誠意を見せるべきなんだろうが、今はここまでが限度だ。

協力するとはいえ、これで顔バレすれば、気配遮断があるとはいえた今までよりも動きにくくなることが考えられる。

そうなると、俺が音無君とかなでちゃんの二人のてえてえをゆっくり干渉できなくななる可能性も出てくるかも知れない。

それだけは…!! 避けなくてはならない…!!（固い決意）

今回の仲村への申し出も、正体と協力する目的は明かせない代わりに、戦力として可能な限り言うことを聞く、という条件を出している。

「なら、作戦の説明に入るわよ」

パンパン、と手を叩き周囲の注目を集めた仲村は、今回の作戦の説明に入つた。まず、ガルデモによる陽動だが、今回は無し。分身体にかかれれば陽動が瞬殺されることは目に見えているため、真正面から正々堂々と行くのだとか。松下が狭い通路で戦うことに不安気な様子を見せている。

「みんな、いい？」

仲村が再び、演台から戦線メンバーを見下ろした。

「作戦は、ギルドを降下し、その最深にて無事天使のオリジナルを保護すること！——では、オペレーション、スタート!!」



戦線のメンバーたちが銃を構え、用心深く辺りを見回しながら通路を進んで行く。先頭を行くのは仲村。対して、俺は列の最後列で背後の様子を見ながら歩く。

「トラップには気を付けてね、野田君」

「二度とあんなへまはしない!! 今度こそ、ゆりつペを守り抜く!!」

俺の目の前で意氣込む野田であるが、この後の展開を知る者としては悲しくなる決意表明である。

まあ、強く生きてくれ。

更に前で、日向とユイによるいつもの絡みを見てえなあと眺めていると、不意に列の足が止まつた。

前の視れば、薄暗い通路の先。設置されている明かりがその姿を映していた。

赤い目の分身体。その両手にはハンドソニックを携えていた。

「ひいやあああ！」

その姿を見て情けない声をあげながら涙目になるユイであつたが、そんな仲間の悲鳴を無視して、仲村が声をあげた。

「うてー！」

銃を携えていた戦線メンバーによる一斉射撃が始まった。

統制のとれた動きは、流石戦線というべきか。長年かなでちゃんと戦い続けてきたけの事はある。

しかし、そんな彼らの攻撃をものともしないからこそ、かなでちゃんは防戦できていた訳で。

そんな彼女の分身であるあれが、銃撃程度でやられるわけがないのだ。

『ガードスキル・ディストーション』

0と1の数字が一瞬彼女を覆う。

弾丸の軌道は容易く捻じ曲げられ、床や壁、天井に穴を開けていく。

そして銃撃が止んだ直後。

彼女は、弾丸のような速度でこちらに突っ込んできた。

反撃できずに、隊列を組んでいた戦線は分身体の突進を避けるのに精一杯の様子。そんな中、最後尾にいた俺は、背中の物干し竿に手をかけた。

「シイツ!!」

「つ!!」

獲物の間合いはこちらが上。

動きに合わせて物干し竿の一撃を見せてやれば、分身体は急遽その軌道を修正。無理矢理な体勢ではあるものの、刀の一撃を免れる形で俺の後ろへと転がった。

「避けられたか……」

後ろを確認してみれば、分身体はすぐさま体制を整えてこちらへと向き直っていた所であつた。

「伏せて！」

そんな中、後ろから仲村の声が響いた。

その言葉に従つて体勢を低くすると、仲村が何かを分身体に向かつて投げた。

直後、すさまじい轟音が耳を襲つた。

グレネードか何かの爆弾でも使用したのだろう。

分身体が吹き飛んだその先に向けて、再び一斉射撃が始まつた。

「やめえ！」

仲村の合図で射撃が止む。

しかし、煙幕のその向こうで、彼女は何事もなかつたように立ち上がつた。

そんな彼女に向けて再び発砲した仲村。

今度はディストーションが解けていたのか、銃弾は彼女の太腿を直撃。分身体はがくりと膝をつく。

「動き出さないうちに縛りなさい！」

早く！ と叫ぶ仲村。

だがその時、言いようもない感覚が俺の背後を襲う。

俺は握りしめていた物干し竿を背後にに向けて勢い良く振るつた。

ガキンッ、と。

固い者同士が打ち付けられる音が通路に響く。

俺を背後から襲つた正体。それはもちろん、先ほどとは別の分身体。

俺はもともと分身体が複数対いることを知っていたため、そこまで驚くことではなかったが、予想外だつたのか戦線のメンバーたちは驚愕を露にしていた。

「しかし、ここで俺を襲うのか……」

襲い掛かってきた分身体と相対する形で刀を構えた。

本来なら、ここで野田が襲われていいところを見せずには脱落するのだが、俺が大きく介入しているために原作とは違う流れになつたのだろう。

「やべえ！ 後ろからも来やがるぜ！」

太腿を撃ち抜かれた分身体はもう回復したようで、再びハンドソニツクを構えて立ち上がる。

これで挟み撃ちされる形となつたわけだ。

「勝ち目はないわ！ あそこの通路に入つて入り口を塞ぐわ！」

状況不利と判断したのか、仲村が横道を目指して駆けだした。分身体を銃で牽制しながらその後に続く戦線。

ひとまず、俺もその指示に従う形で後退する。

そしてギリギリのタイミングで音無君が駆け込むと、入り口の上から、鉄の塊が轟音を立てて入り口を防いだのだつた。

脱落者0名

Dancer in the Dark 2

「ギリギリだつたな、音無」

最後の最後、ギリギリのタイミングで駆けこんできた音無君に手を差し伸べながら声をかける日向。

その言葉に、疲れたように「ああ」と返事をした音無君はその手を取つて立ち上がった。

「なんとか、全員無事のようね。先を急ぎましよう」

全員そろつていることを確認した仲村が、そう言つて先へ進む。

あの鉄塊は、トラップだつたらしい。それを逃走に利用することをあの状況下で考え付くのは流石としか言いようがないだろう。

やはり、リーダーとしての素質はかなりのものだ。

暫く進んでいると、再び通路へと出ることができた。

特に危険がないことを確認した仲村は一度そこで立ち止まると息を吐く。

どうやら、一度ここで状況の把握を行う様だ。

議題は当然、あの天使についての事だろう。それが二体いたのだ。

「前の降下作戦よりもたちが悪いぜ……」

「何で二体もいたんだ……？」

「分身はオーバードライブもディストーションも使うのよ？ つまり、ハーモニクスも使えるつてこと」

音無君の疑問に、当たり前のようにその回答を返す仲村。

そして、直井が進み出て今回の問題点をつらつらと述べていく

要は、分身によるトラップなのだ、これは。

分身が分身を生み出すことができる。故に、その増え方はネズミ算式。

何体いるのかすらわからないが、かなりの数がいることになるだろう。そして、こちらが出向くことも把握されているのなら、その大量の分身体があちこちに配置されてい

るはず。

すでに背後には二体。弾薬の補充もできない状況だ。撤退することも難しい今、進むしかないのだが、この先あの分身が数多く待ち受けていることも考えると絶望的だと言つていいだろう。

……もつとも、俺一人であれば撤退はできるのだが。

それをしてしまうと、目的のカメラの回収ができないため、絶対やらないが。

「一体こんなことして何が目的なんだ……」

「最終的には私たちの完全な更生でしょう。それがオリジナルから引き継がれた彼女たちの使命なんだから」

「でも、何で僕たちが助けに来るつて思つたんだろう？」

「そりや、誰かさんが仲良くしてたし、一緒に川釣りや炊き出しありもしてたからねえ」

仲村のその言葉に、一斉に冷たい目を向けられている音無君。

すごく居心地の悪そうな様子であつたが、俺としてはむしろもつとこいだ。どんどんやつてくれ。

というか、焼き出しのてえてえが見られなかつた分、原作よりもいちやついてくださ

いお願ひします。

「部外者だから口を挟むのもなんだが、もう助けに来てるんだ。何言つても仕方ないだろう」

さつさと進もうぜと促せば、「そうね」とそれに頷いた仲村が歩を進めた。

ぞろぞろと戦線メンバーがその後に続く中、最後列についていた俺のもとに音無君がやってきた。

…………やつてきたあ？

「その、さつきはありがとな、山野」

このお礼は、先ほどの助けに来た云々の事なのだろう。

原作にはない、恐らく語られていないやりとり。個人的に音無君がかなでちゃんといちやついているのが悪い、なんて思われるはこちらとしても心外であつたため口を出してしまつたが、特に流れから大きく逸脱するものではないだろう。

どちらかと言えば、野田が死んでいないことの方が今後の流れに影響を与えるような気

がするのだが……

「……ん？ 山野？」

「あれ、名前違つたか……？」

「つ…………、ンフツ……！」

推しに!! 名前を（以下省略）

「殺す気か？ 音無君」

「なんで!?」

思わず言葉が出てしまつた。

駄目だこんな近距離で推しと話すなんて俺には難易度が高すぎるルナティックそうだまずは素数を数えるのだ1, 2, 3いや1は素数やないやんせやかて工藤こんな近くで推しと二人で話すなんてことが許されてええはずがないやろうそうだ京都に行こう。

「……ふうつ：何でもない。山野であつてゐる。あと、さつきの事についてはそこまで

気にしなくてもいい」

そして願わくば、かなでちゃんと幸せになつてくださいお願ひします。

「そ、そうなのか。とにかく、ありがとう。あと、お前が仲間ですごく心強いよ」

それじゃ、といつて前を行く音無君は、何を話していたんだと日向に肘で小突かれていた。



「山野君、まだ戦闘はできそう？」

「体力的には問題はない。だが、この先の戦闘は厳しくなる」

あれから暫く経つたが、俺たちは現在もギルドへ続く通路を進んでいた。

本来なら、弾薬を消費しながら進んでいるのだろうが、今回に限つてはイレギュラーである俺がいる。

仲村との契約は、戦闘における指示の順守。そのため、ここまで分身体との戦闘はほぼすべて俺が行つていた。

援護射撃もあつたため戦闘は容易に行えた。心情的にオリジナルのかなでちゃんと違うとはわかついていても、見た目が同じと言うだけで殺りづらい。

そのため、基本切り殺さずに気絶させ、後は縛つてポイ、というのがここまで戦闘である。

向こうが殺す気（まあ死にはしないが）でも、こちらはその気がないため不利ではあるが、この体のスペックには感謝しかない。

いやあ！ 明日の筋肉痛が楽しみだなあ！！（白目）

「あいつ、まじでやべえな……ここまであの分身との戦闘ほぼ無傷だぞ……」

「椎名もやられてるやつだつたよな……お前の上位互換じやねえか？」

「いや、俺の方が強い！ ゆりつペ、見ていてくれ！ 今度はこの俺が活躍する！」

後ろで楽しきな話をしているが、特に絡む必要はないかと思うのでそのままにしておく。

抜き身にしていた物干し竿を鞘に納め、先頭を歩く。

「難しい、つてのは？」

「そこまで詳しいわけではないが、確かこの先は人二人が並んで丁度くらいの通路が続くだろう？ それだけ狭いと、この長刀が満足に振るえないんだ」

「そう。ならここからは私たちが主体よ。みんな、いいわね！」

特に元気よく野田が返事を返していた。

まあ、俺が主体で戦っていたため、弾薬の消費は抑えられているんだ。まだ余裕はあるのだろう。

仲村の言葉に甘えて、俺はしばらく休ませてもらうことにしよう。

明日の痛みは変わらないだろうけどな！

それからしばらく通路を進んでいると、その通路の先に人影があつた。

赤い目をした分身体。

「みんな、構えて」

その合図に、各々の銃を構えた戦線。

しかし、そんな中で一人、銃も構えることなく前に歩み出た者がいた。

「ゆりつペ、ここはこの俺に任せてくれ」

ハルバードを肩に担ぎ、自信満々な様子を見せる男、野田。

やべえ…不安しかないんだが。

本当なら、最初に脱落するはずだつた野田がここまで残つている時点で奇跡であるの
だが、ここにきてその幸運も尽きたのだろうか。

「俺は……俺は！ 下位互換何かじやなあい!!」

野田 脱落

「あいつ、下位互換なんて頭の良さそうな言葉知つてたんだな……」

「言つてやるな。先に進むぞ」

まあ、そういうことである。

俺たちが通り抜けるまで持ちこたえたのは流石だと言えるだろう。仲村の「みんな、野田君が抑えている間に急ぐわよ！」には同上しかなかつたが。

はるか後方から聞こえた「俺の屍を越えてえええー!!!」という断末魔なんてなかつた。

そこからは俺の良く知る展開だつた。

松下五段から始まつた柔道による抑え込みによつて、分身一体につき一人の犠牲で最深部を目指す俺たち。

もちろん、こんな狭い通路じや戦力にならないし、俺には俺の目的があるため犠牲にすることもない。

そして、ユイが日向を蹴飛ばしたことによる犠牲で、俺たちはついに目的地に到達するのであつた。



目の前には何かが爆発したような跡。大きなクレーターがあつた。

「ここ」が、元ギルドなのだろう。前回の降下作戦の際に爆破した跡、か。

「ここ」からは一気に最下層へ降りることになるわ。音無君とユイはオリジナルを探して。それと……」

「では、俺は俺の目的を果たすことにしてよう。できることなら、また地上で会おうじやないか」

「そう、ならここでお別れね」

もともと、ここへはカメラがあるかの確認をしに来たのだ。あれば回収するし、なけれれば帰還した後全力で捜索。

とにかく、音無君やかなでちゃんと、戦線の誰かに見られなければセーフなのだ。

では、と片手をあげてその場を後にする。

音無君が何か言いたげではあつたが、これ以上推しと話すことがあれば俺がどうにかなつちやいそうなので遠慮しておこう。

早々に気配遮断を利用して姿をくらました俺は、視界を塞ぐだけで邪魔だつたマスクを外す。

そう考えると、この骸骨マスク、視界を防ぐことがないので本当にすごい。魔力由来だからなのかね？ 流石ファンタジー。

瓦礫は多いが探しもないこともない。が、とにかく広いためこういう時は人手が欲しくなる。ザバニヤ妄想幻像があればよかつたのにな。

「つ!! 見つけた!」

つい声をあげて飛びついた。

そこにあつたのは、紐が途中で切断されたカメラ。

中身を確認してみれば、消されていることもなく俺が記録したてえてえはそのままに

なつていた。

何これめっちゃ嬉しい！

「目的達成！ よし、音無君とかなでちゃんの様子でも……ぐううつ!?」

突如、すさまじい音が俺の体を襲つた。

頭にガンガン響き渡る超音波か何かだろうか。すぐさま両手で耳を塞ぎ、身を縮めた。

幸い、その超音波はすぐに鳴りやんだため俺への被害は軽傷だと言つていいだろう。

「そういえば、ハウリングを使うんだっけか。忘れてたぞ……」

確か、耳栓などで効果を軽減できるやつだ。今後は使わることは無いだろうが、念のため準備でもしておこう……？

「まあ、でも。物の回収はできたんだ。安心安心。後は音無君となかでちゃんの様子でも……」

ふと、手についていたカメラに違和感を感じた。

何気なしに触れている部分は、普通ならツルつとした液晶があるはずなのだが、そこに感じるのには何かが割れた後のような感触。

恐る恐るそこに目をやれば、視界に飛び込んできたのはバツキバキに割れている液晶画面。よく見れば、カメラ全体の損傷も酷かつた。

「…………」

俺は無言でSDカードを取り出した。

取り出した瞬間、粉々になつてご臨終成された。

「…………ふつ」

なるほど、今回はこういう落ちなのか……

「分身体いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!!!!」



かくして、俺の写真はすべておじやんとなつたわけだ。
うん、めっちゃ落ち込んだ。なんなら、次の日に当然のように襲い掛かつてきの筋肉
痛がどうでもいいと思うほどには。

だが、物語はこれから終盤に入していく。ここまでくると、もはや音無君とかなで
ちゃんのてえてえが合法的に増えていく。

もう、俺は写真なんて撮らない。

すべて、この脳内メモリに保存してやろうじやないか!!!

筋肉痛で動けないベッドの上で、俺はそう思いなおしたたたた
!?!?

「……ん？」

痛みに耐えながら、今後の活動について考えていると、インターホンが鳴った。誰かが訪ねてきたらしい。

はて、ここは俺の一人部屋で同居人はいないのだが……となると俺に用と言うことになる。

「誰だ？」と思いつつも、俺は痛みに耐えつつドアを開けた。

「はいはい、どちら様ですか……」

「よ、よう山野。ちょっと、いいか？」

「……こんにちは」

【朗報悲報】推しが推しと尋ねてきたんじやが、おれはどうしたらいいんだろうか【死ぬしかない】

Good bye Days のその前に

「……とりあえず、お茶でもどうぞ」

「わ、悪いな……」

「いただくわ」

震える手で用意したお茶を零さないようにそつと二人の推しの前に差し出した。

こうして目の前にした今でも、できることであるならば夢であつてほしいと願つている。

……いや、決して二人の来訪が嫌なわけではないのだ。

ただ、なんというかあれだ。推しに認知されたうえ、リアルに凸られたオタクの心境と言ふのだろうか？

要は、現実味がなき過ぎてなんかもう……うん、すごい（語彙力）

苦笑を浮かべながらお茶のお礼を述べる音無君に対し、特に緊張する様子を見せな

いかなでちゃん。

そんな二人の様子に、この二人らしいな、などと心のどこかで思いながら俺は机を挟んだ二人の向かい側……ではなく、そこから少し離れたベッドに腰かけた。

……何も言うな。あの二人の目の前とか、俺の目が尊死するに決まっているだろう。

つい先ほど決めた脳内メモリは、どうやら玄関の時点で容量をオーバーしてしまったようだ。

「その、こうやつて顔を合わせるのは初めてだつたな……音無だ。音無結弦。よろしく、

山野

「立華かなで」

知つてます。

何処の誰よりも、君たち二人の事を知りたいと思つているのだから。

「山野直樹。一般的のN.P.Cだ」

「その紹介は無理がないか？」

「軽い冗句だ。気にしないでくれ」

もはやこうして顔がバレてしまつていてる時点でNPCを装うのは難しいだろう。
変にしらばつくれるよりも、こうしてゲロつてしまつた方がいくらかはやりやすい。

「今の今まで、お前たちにバレないようになつけてきたんだがな……」

「その、何かすまん……お前の事は直井から聞いたんだ」

「まあ、そう考えるのが普通だろうな。あいつとは一度、この場所で揉めている」

危惧はしていたから、予想通りと言えばその通りだ。

音無君大好きなあの直井であれば、自分の知つてていることはたいてい答えることだろ
う。

名前と部屋の番号くらい、何でもないように伝えそ уд д и ш на а и т.

「揉めた……？」

「あまり気にすることもない。もう終わつたことだからな」

ついこの間の事であるはずなのだが、色々とその後が濃かつたのでもうずいぶん前の
ような気さえしてくる。

「それより、わざわざ二人で、それも俺のところを訪ねてきたんだ。何か話でもあつたんだろう?」

何となく、話の内容は予想できるが、聞く姿勢だけでも見せておく。
俺がこの先の展開を知っているなんてこと、この二人は全く知らないのだから。

「ああ……話すのはいいんだが……」

「どうした? 別に何も気にすることなく、話してくれていいんだぞ?」

「いや、ならせめてこっちを向かないか?」

……

「俺を殺す気か?」

「どうして!?」

「このお茶、うまいわ」

◇

「なるほど、話の内容は理解した」

仕方なく。

仕方なくベッドから降りて二人の前に座つたのは良いものの、そこまでが限界だつた俺は目をつむることで何とか尊死を封じ込めることができた。

そして、肝心の話であるが、なんて事はない。

予想通り、戦線メンバーがこの世界から卒業できるように協力してほしいというもの。

何となくわかつてはいたが、音無君は生前の記憶をちゃんと取り戻したようであつた。

彼の人生を、俺の勝手な回想で語るのは違うだろう。あれは彼の、彼だけの人生だ。俺が語る時点でそこには俺の主観が混在することになる。

なら、何も言うことはあるまい。

彼は彼の人生を、意味のあるもの、報われたものだと感じているのだ。
なら、それでいい。

うつすらと目を開けて、音無君の隣に座るかなでちゃんを見やる。
黙々と湯呑に口をつけてお茶を飲むかなでちゃん。

彼女は、もう今の時点でもわかっているのだろうか。
おそらく、わかっているのだろう。

わかつていて言わないのだろう。

何せ、それを言つてしまえば、彼女はこの世界から卒業してしまってばかり。
再び目を閉じて腕を組む。

「戦線の奴らが卒業できるように、そのサポートを戦線とは関係のない俺に依頼したい。
そういうことで良いのか？」

「ああ。頼む」

迷いのない、熱のこもった声が耳を打つ。

「だが、敢えて聞かせてもらおうか」

その時だけ、俺は無理やりにでも音無君の目を見て問う。

「君以外の奴らは、そんなことは余計なお世話だと、理解した気になるなと言う奴も出でくるかもしないぞ？」場合によつては君が仲間たちから恨まれることになるかもしれない。それでも、君は彼らをこの世界から卒業させるのか？」

「そうだ。俺達に、力を貸してほしい」

再び、今度は俺の目をまっすぐに見つめながら。そして頭を下げるのだ。

……ああ、そうだよ、音無君。

それでこそ、君だ。音無結弦だ。

俺が関わった程度じや、君の根幹は変わらないのだろう。

そもそも生前から、音無結弦はそういう人間だったのだ。

視線を隣に移せば、もうお茶を飲み終えていたのか、かなでちゃんと頭を下げていた。

ああ、もう……この二人は本当に……

「了解した」

「つ！ 本当か！」

ガバッ、という効果音でもつきそうな勢いで顔を上げた音無君。それに遅れて、ゆつくりとかなでちゃんと顔を上げた。

「どこまで力になれるかはわからないが、できる限りの協力はしよう」「ありがとう山野！ 助かるよ」

嬉しそうにしている音無君を見ていると、なんか俺の方も少し嬉しくなつてくる。このまま衝動に任せて、かなでちゃんと抱き合つてもいいんだぞ？ ん？

むしろしてくれ

「私から、聞きたいことがあるのだけれど、少しいいかしら？」

俺の想像の中で音無君とかなでちゃんと抱き合つていると、不意に今までほとんどしゃべることのなかつたかなでちゃんと俺に問うてきた。

「なんだ？」

「あなたが、ナナシノゴンベイ？」

……今ここで、それがくるのか……

「……隠してもしかたない、か。ああ。俺がそのナナシノゴンベイだ」

「そう、ならいいわ」

いいんかいっ

「な、なあ……そのナナシノゴンベイってのは何だ？」

「気になるなら、後で彼女に聞いてくれ。さて、あまり長居しても仕方ないだろう。君もそろそろ戦線のところに戻つたほうが良いだろうしな」

とりえず、これで今後の活動方針が決まった。

予想外の事態ではあったが、俺の目的からそう離れたものではない。あの二人と共に行動できるのであれば、合法的に俺の知らないてえてえが見られるかもしれないのだから。

作戦が決まつたらまた教えてくれ、と二人に告げ、今日のところは戻つてもらうことにした。

二人が並んで帰つていくその姿だけで、もう何というか熱くなるものがある。

さて

とりあえず、今か今かと表に出てこようとしている筋肉痛よ。
俺がベッドに戻るまでは待っていてほしいいいいいいいいいいい

!?!?